

『今昔物語集』卷第二十八についての考察
―「謀り」がもたらす笑いを中心に―

弘前大学人文学部人間文化課程
アジア文化コース日本古典文学ゼミ
一〇H一〇二七 開米彩香

『今昔物語集』巻第二十八についての考察―「謀り」がもたらす笑いを中心に―

【目次】

序章	1
第一章 『今昔物語集』巻第二十八の笑い	4
第一節 嗚呼と物云	4
第一項 「嗚呼」について	4
第二項 「物云ヒ」について	6
第二節 『今昔物語集』巻第二十八の笑いの分類	10
第一項 自業自得の失態に対する笑い―「憎ミ咲フ」	10
第二項 「憎み笑ふ」他の作品との比較	11
第三項 「謀り」によって発生する失態に対する笑い	13
小結	14
第二章 「謀り」の成功がもたらす笑い	16
第一節 謀った者の一方的な笑い	16
第一項 「若キ」人々による「謀り」	16
第二項 「物云」による「謀り」	20
第二節 謀られる者の笑い	22
第一項 為盛朝臣（謀る者）の謀り	22
第二項 官人達（謀られる者）の反応、話を聞いた人々の反応	23
小結	25
第三章 謀りの失敗がもたらす笑い―謀る者と謀られる者の逆転	28
第一節 謀りの内容と謀る者の行動	28
第一項 「謀り」の内容と問題点	28
第二項 「謀る者」と「謀られる者」の立場の逆転	29
第三項 第二十四話「穀断聖人持米被咲語」との比較	30
第二節 謀りによって生じる笑い―「頬咲ム」	32
第一項 笑いの攻撃性と「ほほゑむ」	32
第二項 「頬咲ム」―二重の意味の笑い	33
第三節 笑われる人の反応―恥とその場からの逃走	34
小結	37
結章	39
参考文献	41
付録 『今昔物語集』巻第二十八の笑いの種類	

序章

『今昔物語集』は十二世紀初頭に成立したとみられる説話集である。その成立年代、編者については詳しいことはわかっていない¹⁾。内容は、巻一〜五が天竺部、巻六〜十が震旦部、巻十一〜三十一が本朝部の三部で構成²⁾され、全部で千余話³⁾もの説話が集められている。

本論考で扱うのは、『今昔物語集』巻第二十八である。『今昔物語集』巻第二十八「本朝付世俗」は全四十四話からなり、笑いや滑稽を主題とした巻⁴⁾で、最も早く笑話を体系化したものと考えられてきた。

私が『今昔物語集』巻第二十八に注目した理由は、「笑い」そのものに興味があるためである。人間は笑うことを心得ている動物と定義され⁵⁾、笑うことは日常的で身近な行為であるが、何を笑うかは文化や時代によって異なっている⁶⁾。そこで、古典世界の人々は何を笑っていたのか、具体的にどのような笑い話があったのかに興味を持った。中でも『今昔物語集』巻第二十八には、第五話「越前守為盛付六衛府官人語」の、騙されて下剤入りの酒を飲まされ、集団で下痢に苦しみながら笑い転げるという話などがある。このように現代では単純に笑うことのできない話には、当時の独自の笑いが現れているのではないかと考えた。そのため、『今昔物語集』巻第二十八の笑いを考察することにした。

まずは、『今昔物語集』巻第二十八についての先行研究を確認する。『今昔物語集』巻第二十八が笑話の巻であると考えられてきたのは先に述べたとおりである。その多くは「嗚呼」の語を中心に展開している。

まず、柳田国男氏は、「嗚呼の文学」⁷⁾において、次のように述べている。

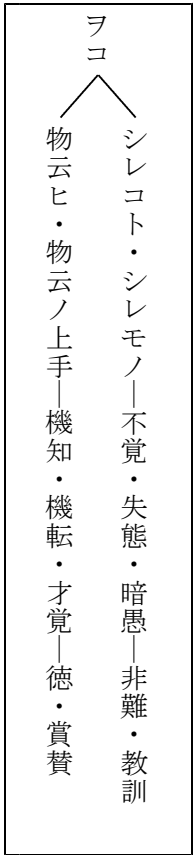
人を楽しませしめる文学の一つに、日本ではヲコという物の言い方があった。(中略)『今昔』の第二十八巻には、四十四のヲコの物語があつて、それが悉く今日の言葉でも、ヲカシイという話ばかりであつた。そうして是には四つ五つ、またはそれ以上もの種類がある。分類は読む人の好みにもよるだろうが、(中略)ただ我々が笑わずにおられぬということのみが一樣なのである。

「ヲコ」は笑わずにはいられないものであるというこの考えは、『今昔物語集』巻第二十八が笑話であるといわれる研究の基礎となっている。また、柳田氏は嗚呼人⁸⁾の例を『三代実録』⁹⁾から挙げ、

人をヲカシを思はせるのが本来はいはゆる嗚呼の者であつて、他にもまだ色々のヲコの者がいたのであり、それにも亦よほど専門に近いのがあつた。(中略)是はただ単にをかしいことばかり言つて、人を笑はせようとした者のことであつて当人自らは決して馬鹿ではなかつた。

とのべ、本来の「ヲコ」は「愚かではかかっている者」という意味だけでなく、もつと広い意味で使われているものであると説いた。また、「中世の文学においても、愚物は人望ある可咲の対象の一つ」とし、「ヲコ」を好意的に捉えている。

次に、小峯和明氏の説¹⁰⁾を確認する。小峯氏は、柳田氏の指摘にある「ヲコ」が本来含蓄ある表現であったことを受け入れ、「ヲコ」は「少なくとも、笑いに結びつく失態、行為で滑稽の意にむしる近かつた」と述べている。そして、「ヲコ」を「シレコト」「物云ヒ」を含む上位概念と位置づけ、次のように分類した。



人を笑わせるものは、無意識に失態を演じて笑われる「シレ者」と、意識的に笑われるように仕掛ける「物云ヒ」に分類できると述べている。無意識のヲコは「シレコト」となり、非難され教訓を伴う。一方、意識的なヲコは「物云ヒ」となり、世の賞賛を浴びる徳にまで高められると説いた。こうして「嗚呼」と「物云ヒ」の関係を明確にした小峯氏の論は、『今昔物語集』卷第二十八の研究において重要である。

次に、前田雅之氏の説¹¹を見ていく。「ヲコ」を好意的に捉えていた柳田氏に対して、前田氏は、『今昔物語集』に使われる「嗚呼」や「白事」は愚行や愚物を指し、非難される対象であると説いた。また、小峯氏の「嗚呼」＝「滑稽」の意であることを受け入れた上で、「嗚呼」がどのように『今昔物語集』に受け取られているか登場人物間の評価と結末評語の差異などから考察し、「嗚呼」が肯定的に受け入れられるのは登場人物間に限られると述べている。さらに、『今昔物語集』の笑い方の特徴についても言及¹²し、性の笑いがなく、下位の者が上位の者を笑うことを好まず、自分の序列を重んじていること、読者が笑えなくても、説話内の登場人物間に笑いが起こっていることなどを述べている。

また、樹下文隆氏は、『今昔物語集』卷二十八について、誰が笑い、誰が笑われ、何が可笑しいのかを考察している¹³。樹下氏は、「嗚呼」は卷二十八において編者にとっては非難の対象でしか無かったとし、思慮の浅い愚かな嗚呼を避け、思慮の深い物云ヒやその行為を賞賛していると指摘している。また、猿楽との関連についても考察している。

また、大谷伊都子氏¹⁴は「嗚呼」を行動的おもしろさ、「物云」を言語的おもしろさと捉え、『今昔物語集』卷二十八の話を考察している。そして、笑話の大部分を占める無知や勘違いといった失敗が、他の説話集に比べ、「謀る者」対「謀られる者」・「だます者」対「だまされる者」の対立の中で生じている場合が多いことを指摘している。そして、「いたずら」は、「謀られる者」の成功談でもあり、「謀る者」の失敗談でもあるという相乗効果が話の面白さを引き立てていると述べている。

以上のように『今昔物語集』卷第二十八は「嗚呼」や「物云」を中心に、笑話としての卷二十八の性格を探るものが多い。しかしその一方で、『今昔物語集』卷二十八は笑話ではないのではないかと新しい説もあがっている。

まず、船城梓氏¹⁵は、これまでの研究が、「嗚呼」と笑いが関わることを前提にしてきたものであること、「物云ヒ」が常に正の評価を受けるものとして扱われてきたことなどを問題にし、それらが必ずしも正しい見解ではなかったことを指摘している。また、『今昔物語集』卷第二十八「近衛舍人共稻荷詣重方値女第一」を例に挙げ、「嘘をつく」、「人をだます」、「謀事をする」という要素が含まれていると考察し、卷二十八のテーマを「妄語」の巻ととらえた。

また、渡辺麻里子氏¹⁶は、第一話「近衛舍人共稻荷詣重方値女語」は、「物云ヒ」と「嗚呼」の両面を兼ね備えた話であると述べた上で、卷二十八の副題である「世俗」を「世俗の智（智慧）」ととらえた。このように、「笑話」としてではない『今昔物語集』卷第二十八の見解もあり、現在も様々な議論がなされている。

最後に、問題の所在について述べる。多くの先行研究は「嗚呼」「物云」を中心に論が進められているが、本論文は、「嗚呼」「物云」についても触れながら、大谷氏の「謀る者」「謀られる者」という考えを元に、「謀り」によって生じる笑いの構図を明らかにすることが目的である。騙し騙される話は、一方にとっては笑える成功譚であるが、もう一方にとっては笑えない失敗譚というように、単純に笑えない話が多く、『今昔物語集』卷第二十八の笑いを考察する上で重要であると考えたためである。

第一章では、「嗚呼」「物云」という語を確認した上で、『今昔物語集』卷二十八の笑いを特に失態の笑いに関して分類し、「謀り」による失態の笑いの特徴を述べる。第二章では、「謀り」の成功がもたらす笑いを考察し、「謀る者」「謀られる者」の笑いの有無、行動などに注目して考察する。第三章では、「謀り」の失敗について、「謀る者」「謀られる者」の立場の逆転に注目して考察する。立場の移動によってどのような笑いが生じるのかに注目し、笑いの構図を明らかにした上で、『今昔物語集』卷第二十八の笑いの一考察としたい。

なお、『今昔物語集』の本文は『新編日本古典文学全集38・今昔物語集(4)』(小学館、二〇〇二年)を用いる。

*1 『今昔物語集』は、成立年代、編者ともに未詳であるが、説話内の登場人物や取り扱われている事件、出典の成立年代の下限から一一三〇年〜一一四〇年の成立とするのが通説である。また、編者についても諸説ある。具体的編者を想定するのは可能性にとどまり、いずれも確証がないため、京都や奈良周辺の大寺僧に擬されることが多い。

*2 卷八、卷十八、卷二十一 は現存せず、当初から未完成であるため存在しないものと考えられている。

*3 収録話は名目上一〇七九話あるが、卷七の第三十三話から第四十話まで、卷二十三の第一話から第十二話が欠落しているため一〇五九話となる。しかし、その中にも題目だけで本文を欠くものが十九話あり、また、本文が途中で欠文となるものが十三話あるため、ここでは千余話と表記している。

*4 『今昔物語集』卷第二十八について、新全集では「本巻はいわば笑話の巻で、洛中洛外に取り沙汰されたユーモラスな話を一括収録している。登場人物は社会の各層にわたり、彼らの演ずる笑いの諸相も多彩をきわめて、王朝社会、とくに貴族官人社会を中心に伝承された笑話のオンパレードに接する感がある。これを読む者は、あるいは哄笑、あるいは苦笑させられるであろうが、すべて単純・明快・闊達であって、平安人の明るい笑いに共感するであろう。」また、新大系では「本朝付世俗」と題されて、笑いを主題とする説話が集成されている。笑いというものが人間に固有の行為であるとすれば、最も人間的な世界が現出していることになる。同時に、ここにはおそらくはじめて笑いというものを体系化する試みがなされた。笑いの契機が何であるかに注目することによって説話が分類されて、同類のものが群をなして編成されている。」と紹介する。

*5 ベルクソン『笑い』(岩波文庫、一九三八年)による。

*6 山口昌男『笑いと逸脱』(筑摩書房、一九八四年)による。

*7 柳田国男『鳴漣の文学』(柳田国男『不幸なる芸術・笑の本願』、岩波文庫、一九七九年)を参考にした。

*8 鳴漣人は、『三代実録』卷三十八の元慶四年(八八〇年)七月二十九日条には「廿九日辛巳晦。御仁寿殿覧相撲。左右近衛府、通奏音楽。散楽雑伎各尽其能。出内蔵寮絹一百疋。賜左右相撲人各一疋。右近衛内蔵富継・長尾米継、伎善散楽。令人大咲。所謂鳴漣人近之矣。亦各賜絹一疋。」とあり、漣人が人を笑わせたことがわかる。

*9 『三代実録』は平安時代の歴史書。六国史の第六にあたる。宇多天皇の勅命。藤原時平、菅原道真などが編纂。清和天皇、陽成天皇、光孝天皇の三代にわたる三十年間を編年体で記述している。

*10 小峯和明『笑う声―笑話の位相』(『説話の声―中世世界の語り・歌・笑い』、新曜社、二〇〇〇年)、『今昔物語集の形成と構造』(笠間書院、一九八五年)を参考にした。

*11 前田雅之『今昔物語集の世界構想』(笠間書院、一九九九年)を参照。

*12 前田雅之『憎(にく)ミ咲(わら)フ光景―今昔物語集』信濃守藤原陳忠説話における強欲と笑い』(『新しい作品論』へ、『新しい教材論』へ、古典編)二、二〇〇三年一月)

*13 樹下文隆『今昔物語集』卷二十八における笑いの意味―誰が笑い、誰が笑われ、何が可笑しいのか―(『説話論集』一二、清文堂、二〇〇三年)を参考にした。

*14 大谷伊都子『今昔物語集』卷二十八の笑話について(『梅花短大國語国文』八、一九九五年一〇月)による。

*15 航城梓『今昔物語集』本朝世俗部の仏教的背景―卷二十八をめぐって―(『日本語と日本文学』三九、二〇〇四年八月)を参考にした。

*16 渡辺麻里子『今昔物語集』卷二十八第一話「近衛舍人共稻荷詣重方値女語」試論―卷二十八の主題と巻頭話としての意味―(『朱』五十四、二〇一一年三月)を参考にした。

第一章 『今昔物語集』 卷第二十八の笑い

本章では、『今昔物語集』 卷第二十八の笑いを考察するために必要である点を整理する。第一節では卷二十八の笑いの特徴付けられるものとして、先行研究でも重要視される「嗚呼」「物云ヒ」の実際の使用例や意味を確認する。第二節では、『今昔物語集』 卷第二十八の笑いの分類を、特に失態という面に注目して行い、自業自得の失態と「謀リ」による失態について例をあげながら考察する。

第一節 嗚呼と物云

『今昔物語集』 卷二十八の笑いの特徴づけられるものとして、「嗚呼」と「物云」の語があげられる。この語は先行研究で様々に論じられており、多くは「嗚呼」は無意識に失態を演じ笑われる者であり、「物云」は意識的に笑いを仕掛ける者とされている。これらの語は、『今昔物語集』 卷第二十八を考察する上で前提となるものであるため、本論文でもこれらの語について辞書の意味と、実際の使用例を確認する。

第二項 「嗚呼」について

「嗚呼（をこ）」は、『角川古語辞典』¹⁾において次のように述べられている。

- ① 愚かではかかっているさま。愚か。ばか。
- ② ふとどきなさま。けしからぬさま。「をこの者」の形で、悪態をついたり非難したりする場合に用いる。

このように「愚か」「馬鹿」の意で解される「嗚呼」であるが、実際に『今昔物語集』 卷第二十八において「嗚呼」の語が使用されている例は以下のとおりである。

【表一】『今昔物語集』 卷第二十八の「嗚呼」の使用例

本文はすべて『新編日本古典文学全集 38・今昔物語集（4）』を使用した。ただしふりがなは省略した。上段は、語の使われ方を「嗚呼」、「嗚呼ノ事」、「嗚呼ノ者」、「嗚呼付」、「嗚呼絵」、「嗚呼絵書」の六種類に分類した。次段はその語がどの話に使われているのかを示した。また、本文中に「咲ヒ」の描写があるものは○、ないものは×を示した。

使われ方	話	本文	解釈	咲ヒの有無
嗚呼	一	イデヤ、行摺ノ人ノ宣ハム事ヲ憑ムコソ嗚呼ナレ。 (新全集／一四九頁)	行きずりの人の言うことを真に受けるのは馬鹿げていると、自分の正体に気づかない夫に妻が語っている。	○
	四	亦我等ニ恐レテ、近ク寄レバ隠レ騒ゲハ、嗚呼ニ極キ物カナ。 (新全集／一六二頁)	殿上人が、田舎者が自分たちに畏敬している様を馬鹿にしている。	○
	六	亦鬢ノ無キ事ハ、若ク盛ナル齡ニ鬢ノ落失タラバコソ嗚呼ニモ可咲クモ有ラメ (新全集／一六四頁)	若いのに鬢がないのは滑稽で面白いかもしれないが、年老いた自分に鬢がないことは当然で、笑われるのを不服に感じている。	○
		「君達ハ元輔ガ此ノ馬ヨリ落テ、冠落シタルヲバ嗚呼也トヤ思給フ。 (新全集／一七五頁)	落馬して冠を落としたことを馬鹿だと思っているだろうという推測。	○

鳴呼ノ事	二	三十四	二十一	九	二十	三十一	三十七	四十一	四十二	鳴呼ノ者	二十六	鳴呼付
<p>本ハ極ク心賢キ兵ニテ思エ有ケルニ、其レヨリ後ハ、兵ノ思エサハ劣テ、嗚呼ノ名ヲ取テゾ有ケル。</p> <p>(新全集ノ二五〇頁)</p> <p>然レバ、心猛ク思量賢コキ者共ナレドモ、未ダ車ニ一度モ不乗ザリケル者共ニテ、此ク悲シテ醉死タリケル、嗚呼ノ事也、トナム語り伝ヘタルトヤ。</p> <p>(新全集ノ一五五頁)</p> <p>此ニ依テ「助泥ガ破子」ト云フ事ハ云フ也ケリ。此レ嗚呼ノ事也、トナム語り伝ヘタルトヤ。</p> <p>(新全集ノ一八六頁)</p>	<p>「世ニ人ノ此ル鼻ツキ有ル人ノ御バコソハ、外ニテハ鼻モ持上メ。嗚呼ノ事被仰ル、御房カナ」</p> <p>(新全集ノ二一〇頁)</p> <p>此ノ主ノシタリ顔ニ、此ク慥ニ取ラムト宣フ、嗚呼ノ事也カシ。</p> <p>(新全集ノ二三九頁)</p> <p>然レバ清廉ガ猫ニ恐ルヲ、嗚呼ノ事ト見ツレドモ、大和ノ守輔公ノ為ニハ、極メタル要事ニテナム有ケルトゾ、其ノ時ノ人云繚テ、世挙テ咲合ヘリ、トナム語り伝ヘタルト也。</p> <p>(新全集ノ二四二頁)</p> <p>男ノ、「馳散シテ逃ナム」ト思ヒ寄ケム心コソ、極テ太ケレドモ、逃ニケレバ、云フ甲斐無キ嗚呼ノ事ニテ止ニケリ、トナム語り伝ヘタルトヤ。</p> <p>(新全集ノ二六一頁)</p> <p>世ノ嗚呼ノ者ニテ、糸痛ウ物咲ヒシテ、物誇リ為ル者ニテゾ有ケル。</p> <p>(新全集ノ二七二頁)</p> <p>古ヘハ此ク世ノ嗚呼ノ者有ケル也。</p> <p>(新全集ノ二七四頁)</p> <p>世ニハ此ル嗚呼ノ者有ル也ケリ。</p> <p>(新全集ノ二七七頁)</p> <p>其レモ同時ニ外記也シ時、腰屈テ嗚呼付テナム有ル。</p> <p>(新全集ノ二二一頁)</p>	<p>容姿が間抜けに見えるということ。</p> <p>賢い兵という評判が一転、愚か者という汚名を被る。</p> <p>車でひどい酔い方をした武士たちは、貴族社会から見て滑稽に見えるた。</p>	○	5								
<p>笑っている人が逆に馬鹿なのだと いう屁理屈。</p>	○	10										
<p>『二中歴』一能歴に不正の例えとして引かれる。言葉で人を欺き、責任をとらないこと。責任をとらないことを編者は馬鹿なことだと非難している。</p> <p>異常な鼻を持つものは他にいないのに、おかしなことをいう人だ、という皮肉。</p>	○	15										
<p>租税を逃れてきた清廉にとつては、真面目に税を納めると得意顔で言う大和守の言葉は馬鹿馬鹿しく思えた。</p> <p>清廉が猫を異常に恐れることは度を過ぎており、馬鹿げていることに思われたが、大和守が清廉から取り立てを行う為には、必要不可欠であった。</p>	○	20										
<p>男の心はたいしたもののようにだったが、逃げてしまったことで、結果的に面白い草で終わってしまった。</p>	○	25										
<p>むやみに笑ったり、誇ったりする大馬鹿者であるという非難の意味が強い。</p> <p>昔はこのような馬鹿な者がいたのだと、現在から見て非難している。</p>	○	30										
<p>世の中にはこのような馬鹿な者がいるのだ、と、四十一話同様非難の意味合いが強い。</p> <p>腰が曲がって、間抜けに見えるのがいた。見た目に対して使われる。</p>	○	35										
<p>○</p>	○	40										
<p>○</p>	○	45										
<p>○</p>	○	50										

鳴呼絵	三十六	其レニ此ノ阿闍梨ハ、鳴呼絵ハ筆ツキハ□ニ書ケドモ、其レハ皆鳴呼絵ノ気色無シ。 <small>(新全集／二五六頁)</small> 只世ニ並無キ鳴呼絵ノ上手ト云フ名ヲ立テ、真言吉ク習テ貴キ者トハ、人ニ不被知デナム有シ。 <small>(新全集／二五六頁)</small>	「鳴呼絵」は平安時代に貴族や僧侶の間で流行した、滑稽・風刺を志向する戯画の事である。阿闍梨はこの鳴呼絵の上手であった。鳴呼絵の上手であることはよく知られていたが、阿闍梨のことをよく知る者だけが彼が真言に通じた尊い者だと知り、他のものは知らなかった。	欠文のため不明
鳴呼絵書	三十六	彼ガ有様吉ク知ル人コソ、止事無キ者トハ知タレ、不然又人ハ、只鳴呼絵書トノミナム知タリシ。 <small>(新全集／二五六頁)</small>	ほとんどの人には阿闍梨はただの鳴呼絵描きと思われていた。	

【表一】にあげたように、『今昔物語集』巻二十八において、「鳴呼」が本文中で使用されるのは全部で十四話あり、そのうち「鳴呼」が五例、「鳴呼ノ事」が五例、「鳴呼ノ者」が二例、「鳴呼付」一例、「鳴呼絵」が一例、「鳴呼絵書」が一例あった³³。また、「鳴呼」という語が使用されていても、本文中に笑いが見られない話も三例見られた。笑いと「鳴呼」はどのように関係しているのだろうか。

「鳴呼」が笑いと結びついている例として、四話の尾張守の発言が挙げられる。髪の毛が無いことを殿上人達に笑われていると知った尾張守は次のように語る。

鬢ノ無キ事ハ、若ク盛ナル齡ニ鬢ノ落失タラバコソ鳴呼ニモ可咲クモ有ラメ。
(新全集 一六四頁)

「鬢が無いことは、若い盛りで髪の毛が無くなっているのなら滑稽で可笑しくもあるだろう」という意である。若禿³⁴「鳴呼」であることが「可笑」と思われ、笑いの対象となることが窺われる。

しかし、「鳴呼」は滑稽で可笑しいと思われる反面、非難される対象でもあった。第二話には、賀茂祭の行列を見ようと慣れない牛車に乗った武士が、牛車の揺れで酷く酔ってしまい、醜態を晒した挙げ句行列も帰ったという話がある。この出来事に対し、編者の評語では次のように語られる。

心猛ク思量賢コキ者共ナレドモ、未ダ車ニ一度モ不乗ザリケル者共ニテ、此ク悲シテ酔死タリケル、鳴呼ノ事也
(新全集 一五五頁)

編者は「勇敢で思慮のある者達であるけれども、牛車に一度も乗ったことの無い者達であったため、このように哀れなひどい酔い方をしてしまったのは、愚かなことである」と述べている。ここでは「思量賢コキ者」³⁵「賢」の対照的存在として「鳴呼」³⁶「愚」という語が用いられている。また、第四十一話、第四十二話の評語内でも、「鳴呼ノ者」を愚物として非難している。樹下文隆氏³⁷の指摘の通り、「鳴呼」は編者にとっては非難の対象となっている。

即ち、『今昔物語集』巻第二十八において「鳴呼」と思われる行動や人物は、無意識に失態を演じて笑われる存在であるが、その失態は時に「愚」とも捉えられ、非難される可能性がある存在とも言える。

第二項 「物云ヒ」について

第一項同様に、「物云ヒ」の辞書的意味を確認する。以下は『角川古語辞典』を参考にした。

- ①ものの言い方。ことば遣い。
- ②ものの言い方が達者であること。また、その者。

イ、条理を立てて見解を主張する者。論客。
 ロ、ものをおかしく言う者。滑稽・洒落・痴(をこ)の言動をする者。
 ハ、事をはばからず直言する者。
 では、『今昔物語集』巻第二十八において「物云ヒ」の語はどのように使用されているのだろうか。使用例は以下のとおりである。

【表二】『今昔物語集』巻第二十八の「物云」、「物可咲ク云フ」の使用例

本文はすべて『新編日本古典文学全集 38・今昔物語集(4)』を参照した。上段は「物云ヒ」と、「物可咲ク云」の二種類に分類した。また、「物云」は『角川古語辞典』に則して①言葉遣い、②ものの言い方が達者であること。その者の二種類の意味に分類した。二段目はその語が使われている話の番号を示した。また、本文中に「咲ヒ」の描写があるものは○、ないものは×を示し、褒め讃える描写があるものも同様に示した。

使われ方	話	本文	解釈	褒める、讃える描写	咲ヒの描写
① 物云	五	此ノ為盛ノ朝臣ハ、極タル細工ノ風流有物ノ、物云ヒニテ人咲ハスル馴者ナル翁ニテゾ有ケレバ、此モシタル也ケリ。 (新全集／一七四頁)	為盛朝臣は「馴者」に世慣れた人で、言葉で人を笑わせる老獪な翁であった。	×	○
	七	供奉本ヨリ物云ノ上手ナリケレバ、何カニ可咲ク語リケム。 (新全集／一八二頁)	供奉は元から言葉が巧みに使って面白く語るのが上手かったため、どんなに面白く語っただろう。	×	○
	八	物云ハ賤キ者カナ。 (新全集／一八三頁)	言葉遣いの間違いに、田舎者は卑しい言葉を使うと嫌みを言っている。	×	○
	十四	中算ハ止事無キ学生也ケルニ、亦此ノ物云ヒナム可咲カリケル、トナム語り伝ヘタルトヤ。 (新全集／一八四頁)	中算はすぐれた学生だったが、言葉の使い方も面白かった。	○	×
	十五	昔ハ、女ナレドモ此ク物云ヒ可咲キ者共ナム有ケレバ、世ノ人モ興有テゾ思ケル、トナム語り伝ヘタルトヤ。 (新全集／一九四頁)	昔は、女性でも言葉を面白く使う者がいたので、世の人も面白がった。	○	○
	二十七	此ノ講師ハ物云ヒ可咲キ奴ニテゾ有ケレバ、然モ云ケル也、トナム語り伝ヘタルトヤ。 (新全集／一九七頁)	講師は、言葉遣いが面白い奴だったため、海賊を欺くことができたということ。	○	○
② 物云	十一	「先ズ、心ハ不知ズ、見目ハ吉キ目代形ナメリ。人物云ヒ、憎。気ナル気色シタリ」 (新全集／二二二頁)	心の内はわからないが、姿はよい目代のように、人柄や言葉遣いも良さそうに見える。	×	○
	十三	感秀本ヨリ極タル物云ニテ有ケレバ、唐櫃ノ内ニテ此モ云フ也ケリ。 (新全集／一九〇頁)	感秀は元々ものを面白くいう人だったので、唐櫃に入られても面白く窮地を脱することができたのだと、感秀を褒めている。	○	△「可咲クシタリ」
	院聞シ食テ、「此奴、痛ク申シタリ。	花山院は事をはばから		○	×

				物可咲ク云			
			十四	十六	七	九	十
	物云ヒニコソ有ケレ」ト被仰テ、忽ニ召出シテ、禄ヲ給テ被免ニケリ。 然レバ、「延正、元ヨリ物云ヒ也ケレバ、物云ヒノ徳見タル者カナ」トゾ人云ケル。 亦物云ヒニテ、万ノ殿上人君達ナドニ云合テ、遊敵ニテナム有ケル。 仁浄ハ本ヨリ然ル物云ヒニテ有ケルヲ、八重ガ然サ云ヒ返シタリケム心憎ク微妙ケレ。 此ノ史ハ極タル物云ニテナム有ケレバ、此モ云フ也ケリ、トナム語り伝ヘタルト也。 物可咲ク云テ人咲ハスル説教教化ヲナムシケル。 此助泥ハ物可咲ク云フ者ニテナム有ケル。 武員ナレバコソ、物可咲ク云フ近衛舍人ニテ然モ、「死ナバヤ」トモ云ヘ、不然ザラム人ハ、極テ苦リテ此モ彼モ否不云デ居タラムハ、極ク糸惜ナムカシ、トナム伝ヘ語ケルトヤ。	（新全集／一九三頁） 「鍛冶ノ徳ニ口ヲ見テ、物云ヒノ徳ニテ被免ル奴カナ」トゾ、上下ノ人云ケル、トナム語り伝ヘタルトヤ。 （新全集／一九三頁） 亦物云ヒニテ、万ノ殿上人君達ナドニ云合テ、遊敵ニテナム有ケル。 （新全集／一九四頁） 仁浄ハ本ヨリ然ル物云ヒニテ有ケルヲ、八重ガ然サ云ヒ返シタリケム心憎ク微妙ケレ。 （新全集／一九四頁） 此ノ史ハ極タル物云ニテナム有ケレバ、此モ云フ也ケリ、トナム語り伝ヘタルト也。 （新全集／一九九頁） 此ノ元輔ハ駟者ノ、物可咲ク云テ人咲ハスルヲ役ト為ル翁ニテナム有ケレバ、此モ面無ク云也ケリ、トナム語り伝ヘタルトヤ。 （新全集／一七七頁） 物可咲ク云テ人咲ハスル説教教化ヲナムシケル。 （新全集／一七七頁） 此助泥ハ物可咲ク云フ者ニテナム有ケル。 （新全集／一八六頁） 武員ナレバコソ、物可咲ク云フ近衛舍人ニテ然モ、「死ナバヤ」トモ云ヘ、不然ザラム人ハ、極テ苦リテ此モ彼モ否不云デ居タラムハ、極ク糸惜ナムカシ、トナム伝ヘ語ケルトヤ。 （新全集／一八八頁）	ずんば大聲で院に直言したことを気に入らぬ、褒美まで与えて許した。延正は元々口達者だったので、その徳で許されたのだ、と物云を賞賛する。鍛冶師であることで憂き目に遭い、口達者のおかげで許されたのだと世間の人は語った。面白いことを言う人だったので、殿上人や公達の遊び相手になっていた。 仁浄は元々口達者だったが、ただの下女である八重がそれを言い負かすほどの口達者だったのは、すばらしいことだった。 この史はかなり面白いことを言う奴だったのだから、自分の窮地にも平然と盗人をだますことができたのだということ。 元輔は世慣れた人物で、面白いことを言って人を笑わせるのが得意な翁だったため、冠を落とししたことを長々と弁解できたのだということ。 物云を面白く言って人を笑わせる説教をしていた。 助泥は面白いことを言う者だった。しかし、この話では助泥のいたずらに僧正は怒っており、笑いは見られない。面白いことを言う舎人である武員だからこそ、気まずい空気を打ち破るために「死にたい」などといえた。そうでもないものは哀れにも何も言えず座っているだろう、と武員の咄嗟の対応に感心している。	○	×	×	×

50

45

40

35

30

25

20

15

10

5

	三十五	而ル間、既ニ其ノ時ニ成ヌレバ、大臣屋ノ前ニシテ、次第二座ヲ敷テ、口聞物有テ、物可咲ク云フ者ヲ各儲テ、其座ニ向様ニ居ヌ。	(新全集／二五二頁)	種合せは草花の美しさの優劣を競うもので、常に真剣勝負であった。その勝負には弁舌が上手く巧みに論争する者が必要不可欠で、両座にそれぞれ座らせていた。	×	△ 「物可咲ク云フ者」を笑つたのではない
四十三	世ノ口者ニテ、物可咲ク云テ、人咲ハスル侍有ケリ。(新全集／二七七頁)	世ニハ墓無キ事ニ付テ、此ク物可咲ク云フ者ノ有ナリケリ。	(新全集／二七八頁)	面白いことを言つて人を笑わせる侍がいた。世の中にはちよつとしたことにも面白くいう者がいるのだ。	×	○

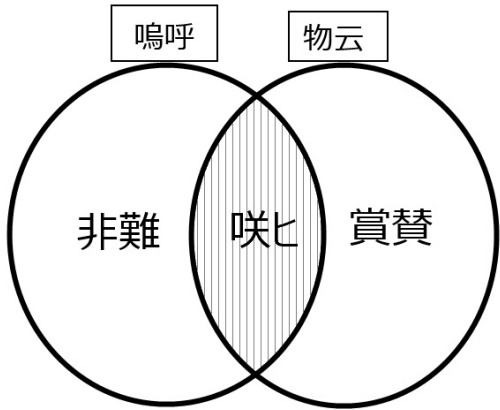
『今昔物語集』巻第二十八に「物云」と表記されているものは九例あり、①言葉使用という意味と、②口達者の意味の二つがあった。また、「物可咲ク云」と表記されているものは六例あり、これらも言葉を面白く扱つて人を笑わせる者を指すため、「物云」の一部と考えられる。

第五話には、「物云ヒニテ人咲ハスル馴者ナル翁」が登場する。「物云ヒ」は口達者で、人を笑わせる世慣れた翁である。同様に第十四話「物云ヒ可咲キ者共」、第十五話「物云ヒ可咲キ奴」など、「物云」が面白い者達がおり、いずれも意識的に面白いことを言うことで人を笑わせようという意識がある者達であった。

「物云」という語が用いられる話では、「嗚呼」同様必ずしも笑いの描写があるわけではない。しかし、笑いの描写が無い代わりに、「物云」を褒め讃える描写が五例見られた。これは「嗚呼」には見られない「物云」固有の特徴である。即ち、意識的に面白いことを話し、笑いを仕掛けていく「物云」は、時には賞賛の対象ともなっていたと言える。

第九話の「物可咲ク云フ者」の助泥の話は例外で、笑いも褒め讃える描写も見られないが、そのことは次の章で取り扱うことにする。以上が、「嗚呼」「物云」の実際の使用例と解釈である。

【図一】嗚呼と物云の関係



【図一】は、『今昔物語集』巻第二十八において、「嗚呼」と「物云」と呼ばれる人々は、笑われるという点において共通するということを図示したものである。「嗚呼」固有の特徴として、非難されることがあるということが挙げられる。また、「物云」固有の特徴としては、賞賛されることがあるということがあげられる。「嗚呼」なるものが賞賛されることはなく、「物云」が非難されることはないといえる。

第二節 『今昔物語集』卷二十八の笑いの分類

一口に笑いと言っても、笑いには嘲笑、微笑、爆笑、苦笑、失笑など、様々な種類がある。ここでは、『今昔物語集』卷第二十八には具体的にどのような「咲ヒ」⁶が書かれているのかを、特に失態に対する笑いを中心に考察する。

笑いの中でも、『今昔物語集』卷第二十八に多くみられるのは失態に対する嘲笑や嫌悪の笑いである。⁷『今昔物語集』卷第二十八は単純に愉快な笑い話として読むことはできないのである。

自分の失態で笑われる話には、自業自得の失態の場合と、他人に謀られて発生する失態がある。

第一項 自業自得の失態に対する笑い―「憎ミ咲フ」

ここでは、自業自得の失態を演じる者への笑いとして、『今昔物語集』卷第二十八の「憎ミ咲フ」⁸という語について、①笑われている人、②笑う人と笑いの起きている場所の二点に注目して分析する。「憎ミ咲フ」が使用されている話は、『今昔物語集』卷二十八第三十三話、第三十八話「信濃守藤原陳忠落入御坂語」、第四十二話「立兵者見我影成怖語」¹⁰の二つであるが、ここでは第三十三話を中心に考察する。以下に、第三十三話「大蔵大夫紀助延郎等唇被詐語」の梗概を示す。

大蔵大夫紀助延が備後国に逗留中の出来事。五十歳ほどの郎等がふざけて、逃げた女房かと言いながら亀（スツポン）と接吻しようとして唇を深く噛まれてもがき苦しむ。亀の首を切り落としてもらってようやく解放されるも、傷口は長く病みついてしまった。人々はこれを憎み笑った。

①笑われている人について

ここでは、第三十三話「大蔵大夫紀助延郎等唇被詐語」における、笑われている人への説明部分を本文から確認する。

年五十許ナ⁹有ケル郎等ノ片白タル有ケル。糸見苦シキ虚□ヲナム常ニ好ケル。…
(中略) …本ヨリ片白タリケル男ノ、虚□ヲ好ケレバ、此ル白事ヲモシテ、病迷ヒテ、人ニモ憎ミ被咲ケル也。

(新全集 二四六～二四七頁)

亀に唇を噛まれるという失態を演じた郎等は、傍線部①では少々馬鹿、少し足りない

の意である「片白」¹¹と言われている。また、「糸見苦シキ虚□ヲナム常ニ好ケル」からは、見苦しい悪ふざけをいつも好んでする者であるということが確認できる。傍線部①で述べられていることは、②でも繰り返し強調される。郎等自身に問題があるため、愚かな事をして、怪我までして人に憎み笑われるのだと述べられている。また、この郎等の行動は傍線部③「白事」¹²と言われている。これもまた愚かな事、馬鹿げたことの意であり、郎等が愚かで常軌を逸した人物であることを強調し、非難している。

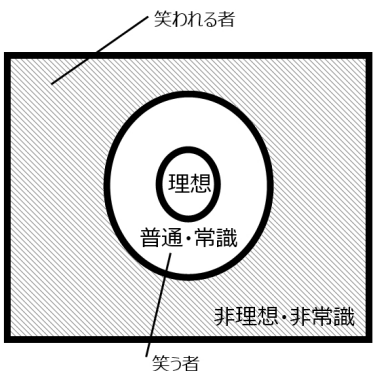
また、郎等自身に人を笑わせる自覚は無く、「憎ミ被咲」たのは悪ふざけを行ったために起きた無自覚の失態のためである。

また、第三十八話の信濃守は、崖から落ちたものの危機一髪で木に引つかかり助かった者であるが、心配する部下を余所に崖下に生えている平茸を拾っていた。この信濃守は「糸ムク付」¹³、心、即ち怖ろしいほどの強欲の者であると言われている¹⁴。さらに、第四十二話の郎等は人を警固する役目であるのに、「人ニ猛ク見エムト思テ、艶ズ兵立ケル者」と兵ぶつてはいるが、「臆病」であると言われている¹⁵。

「憎ミ咲」われる人々は、全て笑われる者に何らかの問題があり、それを非難、あるいは侮蔑されている。第三十三話は「片白」¹⁶ 少々足りないことで、第三十八話と第四十二

話は信濃守、警固の役としてあるべき姿でないことで非難の対象となっている。このことを図示したものが【図二】である。また、いずれも人を笑わせようとする意識はなく、自身の性格や人柄が徒となり、無意識に失態を演じている。

【図二】 笑い笑われる関係図



『今昔物語集』内の「憎ミ咲フ」は、常識から外れていたり、理想から外れていたりすることで笑われる対象となっている。【図二】は、笑う者と笑われる者の位置を示している。常識の中には、さらに理想とされるものもある。笑う者は常に常識の枠内から、常識を外れた枠外の者を笑っている。

② 笑う人と笑う場所

次に、三十三話「大蔵大夫紀助延郎等唇被昨語」における、笑う人と、笑いが起こっている場所について確認する。

然レバ異者共、皆寄テ刀ノ峰ヲ以テ亀ノ甲ヲ打テバ、亀弥ヨ昨入りニ昨入ル。然レバ男、手搔テ、迷フ事無限シ。異者共ハ此ク迷フヲ見テ糸惜ガルニ、亦外ニ向テ咲フ者モ有ケリ。：此レヲ見聞ク人、主ヨリ始メテ、「糸惜」トハ不云デ、憎ミ咲ヒナムシケル。

(新全集 二四七頁)

苦しみがく男を可哀想と思う人がいる一方で、傍線部②にそっぽを向いて笑う人がいる。笑っている人は郎等の同僚などで、身分は同程度だと考えられるが、直接本人に向かつては笑っていない。同程度の身分であっても、直接笑うのは憚られると考えられるが、そもそも笑っていることを気づかせるつもりもなく、行動を改めさせるつもりもない。笑われる者は徹底的に笑われる者としての位置に置かれてしまう。

また、三十八話は、強欲がすぎる信濃守を内心憎らしく思いながらも、その場では笑わず、隠れて部下達だけで笑っている。前田氏¹⁶はこのことについて、『今昔物語集』では下位者が上位者を直接笑うのを好まないとし、身分的序列意識を尊んでいると述べている。第四十二話は、妻が臆病な夫に対して「憎可咲ク」思うのだが、その場では笑わない。ここまでは他の二話と同様だが、夫のあまりの馬鹿らしさに妻は呆れてその場で笑っている。この笑いは非難や侮蔑というよりは、仕方のない人だと思いつつも許している笑いではないかと考える。夫婦という近い関係の人には、「憎い」と思っても、相手との関係を重視し、笑うことによって相手との関係を和らげていると考えられる。

第二項 「憎み笑う」他の作品との比較

ここでは、「にくむ」という単語も視野に入れながら『宇治拾遺物語』『十訓抄』等から「にくみわらふ」例を検討する。

まずは『十訓抄』の例で「憎む」と「わらふ」の関係を考察する。

賈大夫といひける人、形きはめて醜かりけり。めとるところの女、これを憎みて、三年の間、ものいはず、笑はざりければ、男、嘆き恨みけれども、かひなかりけり。野に出でて遊ぶ時、一つのきぎすを射て、これを得たり。その時、この妻、はじめてうち笑みて、ものいひけるとなむ。

『十訓抄』下・十ノ五十五／新全集 四四七頁)

あまりにも容姿が醜い夫をもった妻が、これを「憎み」、三年もの間一言も物も言わず、笑いもしなかったという話である。「憎む」度が過ぎると、相手を受け入れることを徹底的に拒否し、笑うことは無い。山田みどり氏¹⁷は、「にくむ」は無視もできないが受け入れることもできない語とし、「わらふ」は自分に無関係のものとして転化する語として「にくむ」と「わらふ」は逆の要素を持っていると述べており、「にくみわらふ」という行為は「にくむ」ことへの一種の対処法であるとしている。このことから、「憎む」と「笑う」が共存することは、「憎む」行為を和らげているのではないかと考察できる。

次に、『宇治拾遺物語』四八話「雀報恩の事」から、「憎み笑ふ」例を確認する。

あからさまに物へ行くとても、人に、「この雀見よ。物食はせよ」など言ひ置きければ、小孫など、「あはれ、なんぞでふ雀飼はるる」とて憎み笑へども、「さはれ、いとほしければ」とて飼ふ程に…

(新全集 一三一〜一三二頁)

新全集注によれば、ここでの「憎み笑ふ」は、軽蔑して嘲笑しているのではなく、子や孫が雀の世話をしなくてはならなくなったため、嫌がりながらも苦笑しているという¹⁸。ここでは筆者も山田氏に従い、憎むは「受け入れることも無視することもできない語」であると捉え、子や孫は雀を自分たちで飼うことは受け入れたいが、母・祖母の頼みであるから仕方なく受け入れていると考える。また、ここで笑う者は笑われる者に対して直接笑っている。これは、傍線部①で点線部の発言を受け入れながら、それでも可哀想だから、と述べる老女の言葉から伺うことができる。ここでの「憎み笑う」は、『今昔物語集』巻二十八の三十三話、三十八話などと比較すると非難の気持ちは少なく、どこか相手を許容する意味を持っていることから、『今昔物語集』巻二十八第四十二話に近い話である。

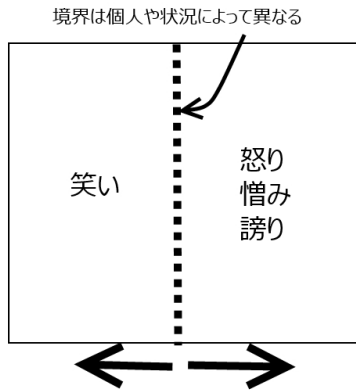
また、『宇治拾遺物語』九三話「播磨守為家の侍佐多の事」を確認する。

ありのままの事を語りければ、「さてさて」といひて笑ふ者もあり。憎がる者も多かり。女をばみないとほしがり、やさしがりけり。

(新全集 二三一頁)

これは無教養な下級役人の佐多という男が、都の女から貰った和歌を理解できずに自滅する話で、佐多が女の和歌を貶し怒りを露わに事の有様を語った場面である。ここでは佐多に対しての反応が二種類ある。①笑う、②憎がるである。山田氏は笑うと憎むには逆の要素があると述べていたが、対照的な反応である一方で、笑うと憎むはごく近い関係にあると考えられる。笑う者も憎む者も、佐多に対して非難や侮蔑の意味を持っている。笑っている者は呆れながらもまだ佐多を受け入れようとはしているが、憎むものは呆れ果てて佐多を拒否している。「憎む」と「笑う」の境界線は個人によって異なるため、このような事が起こるのだと推測できる。以上のことを図示すると、【図三】のようになる。

【図三】「憎む」と「わらふ」の境界図



【図三】は、「憎む」と「わらふ」の境界図を示したものである。同じ事柄に対しても、人によって「憎む」場合と「わらふ」場合があることで、「憎む」と「わらふ」が表裏一体の関係にあるものと考えられることができる。また、この境界線は個々人の考え方やその状況によって移動するものである。

第三項 「謀り」によって発生する失態に対する笑い

大谷伊都子氏は、『今昔物語集』巻第二十八の笑いは「嗚呼」なる行動が他人の企んだ計略に引つかかることよって起こっていることが多いと指摘している。本論文では、相手を騙す事、計略を企てることを全て「謀り」と表記する。また、稿末に付録として『今昔物語集』巻第二十八全話の笑いの種類を、誰が誰を笑っているのかを整理し、分類した表を添付した。

『今昔物語集』巻第二十八の中には、実際に「謀り」や「案」などの語が使われている話が八例あり、内容を含めて考えれば約半数は「謀り」が関係する話であると考えられ、「謀り」が『今昔物語集』巻第二十八において重要な要素であると考ええる。

『今昔物語集』巻第二十八において「謀り」の規模は様々である。例えば、第二十五話「彈正弼源頭定出被咲語」では、職事で申し文を賜る際、こつそりと自分の下半身を露出していた男の話であるが、それを見たものはたまらず吹き出した。このように、単なる悪ふざけとしての「謀り」もあるが、第二十四話のように天皇を騙したり、人を殺害しようとするという悪ふざけでは済まされない悪質な「謀り」もある。

また、「謀り」話の例として第一話「近衛舍人共稻荷詣重方女値語」を考察する。元々女好きで浮気がちであった夫が、変装した自分の妻とも知らずに口説くという大失態を犯し、妻には散々にしかられ、同僚の舍人や若い公達などに笑いものにされるといふ話である。

妻は、自分の夫が浮気しているということ、夫の同僚達から聞いており、それを確かめるべく美女に変装することにした。そうとも知らず美女を口説く重方が、妻に騙されたのだと気づいた場面を以下に示す。

(重方が) 低シテ念ジ入タル髻ヲ、烏帽子超シニ此ノ女ヒタト取テ、重方ガ頼ヲ山響ク許ニ打ツ。其時ニ重方奇異ク思エテ、「此ハ何ニシ給フゾ」ト云テ、仰ギテ女ノ顔ヲ見レバ、早ヲ、我が妻ノ奴ノ謀タル也ケリ。

(新全集 一四九頁)

山も響くほどにひっぱたかれた重方は、ようやく女の顔をまじまじと見る。この時初めて自分の妻が変装していたものだったのだと気づくのである。この後、妻には散々に叱られ、罵倒される。

また、妻が上手く夫を騙したと知った時の夫の同僚の舍人達の反応は以下の通りである。

其ノ時、舍人共、「吉クシ給ヘリ。然バコソ年来ハ申ツレ」ト讚メ嗤シル

(新全集 一五〇頁)

舍人達は、妻の「謀」の成功をほめそやしている。ここで謀られた者は元来浮気ばかりしていた夫であり、妻が美女に化けることなど知る由もなく、油断しきった状態であった。大谷氏は第一話の「謀り」は、「自分に害を与える相手に対し仕返しする形」でなされると述べている。この場合の「謀り」の成功は懲らしめの意味合いが強く、そのことを舍人達は賞賛しているのだと考えられる。

また、本文中の笑いが確認できる部分は以下の通りである。

妻、「穴鎌マ、此ノ白物。目盲ノ様二人ノ気色ヲモ否不見知ズ、音ヲモ否不聞知デ、嗚呼ヲ涼テ人ニ被咲ルハ、極キ白事ニハ非ズヤ」ト云テゾ、妻ニモ被咲ケル。其ノ後、此ノ事世ニ聞エテ、若キ君達ナドニ吉ク被咲ケレバ、若キ君達ノ見ユル所ニハ、重方逃ゲ隠レナムシケル。

(新全集 一五一頁)

重方は妻に「嗚呼」「白物」「白事」と罵倒されながら笑われている。はじめは夫の浮気にカンカンに怒っていた妻であったが、この笑いは、第四十二話の妻が夫を「憎ミ咲」つたのと同じく、どうしようもない馬鹿なことだと思いつつも、自分の夫であるから仕方なく呆れながらも許容している笑いである。また、この話が広まると、若い公達などに

笑われるようになった重方は、「逃ゲ隠レ」している。重方は笑い者になることを全く予想していなかったが、浮気性である自分の行動が原因で笑われていることを自覚している。そのため、笑い者となることを恥じて、逃げていたのである。大谷氏は第一話を、勧善懲悪の話として認識している。²⁰

しかし、すべての「謀り」話が勧善懲悪的な話であるわけではない。寧ろ、『今昔物語集』巻第二十八の「謀り」話の多くは、現代では理解不能な話である。例えば第五話に登場する官人達は、「謀り」によって下剤入りの酒を飲まされ、腹を下して集団で下痢をするという悲惨な目に遭いながらも、「謀り」をした為盛を憎からず思っている。「憎む」と「笑う」の境界線は相手との関係や個人によっても異なると述べたが、それを考慮しても、現代的には笑えない話である。また、第十八話は毒茸で毒殺を計画するという話であるが、毒茸を食べさせられた別当は、自分を殺そうとした相手に対して「頬咲ム」でいる。次章からは、「謀り」によって生じる笑いほどのようなものであったのか、笑い笑われる構図を明らかにし、人々は「謀り」をどのように認識していたのかを考察していく。

小結

本章は、『今昔物語集』巻第二十八の笑いを考察する上で重要と思われる点を整理した。第一節では、「嗚呼」「物云」についてそれぞれの使用箇所、辞書的意味を確認し、「嗚呼」は非難される可能性を伴いながら笑われる存在、「物云」は巧みな機知で賞賛される可能性がありながら笑われる存在と考察した。第二節は、『今昔物語集』巻第二十八の笑いを、特に失態の話について分類した。失態には、自業自得の失態と、「謀り」によって生じる失態の二種類があった。自業自得の失態による笑いとして「憎ミ咲フ」という語を取り上げ、第三十三話を中心に考察した。「憎ミ咲フ」は相手を非難し、嘲笑する意味があるが、相手との関係や個人差によって、「憎む」と「笑う」の境界線が変わることを明らかにした。また、「謀り」による失態として、第一話のように現代でも理解できる話もあるが、多くは現代的に理解できず、笑えない話であることを示した。

25

20

15

10

5

*1 『角川古語大辞典』（角川書店、一九九九年）。

*2 嗚呼絵は、戯画の一種。戯画は、ふざけて書いた絵、滑稽な絵、風刺的な絵の総称。即興的で、人物の表情や動作を誇張して表現しており、一種のおかしみの感じられるものがある。平安時代では貴族や僧侶の間で、滑稽・風刺を志向する戯画がかかれ、このような絵は「あて絵」、「嗚呼絵」と呼ばれた。花山天皇は「あて絵」がうまかった。平安時代末期ないし鎌倉時代初期に制作された絵巻には、こうした誇張性をおびた表現が特に説話画系の作品にしばしば見られる。『信貴山縁起』『吉備大臣入唐絵巻』など。『国史大辞典』を参照した。）

*3 王淑芳『今昔物語集』における笑い―巻二十八を中心として―（『日本語日本文学』一〇、一九八三年十二月）では、「嗚呼」十一例、「嗚呼ナリ」六例、「嗚呼付」一例、「嗚呼絵」三例、「嗚呼絵書」一例が用いられている。」と述べている。本論考では嗚呼絵の使用例はすべて三十六話であることから一例としてまとめた。

*4 樹下文隆『今昔物語集』巻二十八における笑いの意味―誰が笑い、誰が笑われ、何が可笑しいのか―（『説話論集』一二、清文堂出版、二〇〇三年）による。

*5 *6 『今昔物語集』巻第二十八の笑いは、「咲」という文字で表されている。「咲」は「笑」の古字。『広漢和辞典』（大修館書店、一九八二年）を参照。）

*7 土井廣子氏は「嘲笑がこの巻での笑いの基調である」と述べている。

*8 本文では「ミ咲フ」となっているが、ここでは全て新字体「憎ミ咲フ」と表記する。

*9 三十八話「信濃守藤原陳忠落入御坂語」の梗概は以下の通りである。

信濃守藤原陳忠が任期を終えて上京する途中の出来事。信濃守は御坂峠で馬もろとも谷底に転落したが、大きな木の枝に引っかかって助かる。郎等たちが籠を下ろして救助しようとする、最初に下ろした籠には平茸がいっぱい詰まっている。次に下ろした籠で信濃守は引き上げられるが、やはり片手にいっぱい平茸をつかんでいた。自分の命が危険な目に遭ったのにも関わらず、なおも谷底の平茸を取り残したことを悔しがるという強欲の信濃守を、郎等たちは憎み笑った。

*10 第四十二話「立兵者見我影成怖語」の梗概は以下の通りである。

ある受領の郎等で、臆病なのに勇敢ぶっていた者がいた。郎等の妻が、障子に映った自分の影を盗人と勘違いして郎等に告げたものの、臆病な郎等は言い訳をして寝入ってしまった。ふいに郎等のそばの障子が倒れると、盗人が襲ってきたと勘違いして悲鳴をあげる始末。盗人がいないとわかるとまた勇敢ぶる夫を、妻や世間の人は憎み笑った。

*11 『日本国語大辞典』では「片痴」の項に、「少し愚かである。ちよつと馬鹿である」とある。また、『角川古語大辞典』では「片癡」の項に、「うすばかである。常に状態的意味を表すのに用いる。」とある。いずれも少し馬鹿、少し愚かの意味で、「痴れ」と比べると程度は弱い。

*12 小峯和明氏は「中世笑話の位相『今昔物語集』前後」(『日本の美学』二〇、一九九三年一月)において、「シレコト」を無意識のヲコとし、非難され教訓を伴うものと指摘している。

*13 「むくつけし」は、①気味が悪い。怖ろしい。②無骨だ。むさくるしい。の意があり、ここでは①の「怖ろしい」の意でとる。

*14 信濃守に対しての説明部分。編者の評語である。「此レヲ思フニ、然許ノ事ニ値テ、肝心ヲ不迷ハサズシテ先ズ平茸ヲ取テ上ケム心コソ、糸ムク付ケレ。増シテ便宜有ラム物ナド取ケム事コソ、思ヒ被遣ルレ。」(新全集 二六五頁)とあり、危険な目に遭ったにも関わらず、平然と平茸を取る強欲さを怖ろしいほどだとしている。また、在任中は取れるものはどれ程取ったことだろうかと推察している。

*15 の臆病な夫(郎等)に対しての説明部分。編者の評語である。「世ニハ此ル嗚呼ノ者モ有ル也ケリ。実ニ妻ノ云ケム様ニ、然許臆病ニテハ、何ゾノ故ニ、刀弓箭ヲモ取テ、人ノ辺ニモ立寄ル。」(新全集 二七四〜二七七頁)とあり、世の「嗚呼」の者と言われ、臆病であっては、どうやって刀や弓を以て人を警護することができるのかと非難している。

*16 前田雅之「憎(にく)ミ咲(わら)フ光景」(『今昔物語集』信濃守藤原陳忠説話における強欲と笑い)『新しい作品論』へ、(『新しい教材論』へ『古典編』二、二〇〇三年一月)による。

*17 山田みどり「悪(にく)みわらふもの」(『成蹊国文』二八、一九九五年三月)による。

*18 『新編日本古典文学全集 宇治拾遺物語』一三二頁注二による。

*19 一話、二話、四話、五話、八話、十八話、二十四話、三十一話、四十一話の八例。

*20 大谷伊都子「沙石集の笑話について」(『語文(大阪大学)』五三・五四、一九九〇年三月)による。

第二章 「謀り」の成功がもたらす笑い

『枕草子』¹第六九段には次のような記述がある。

たとしへなき²もの 夏と冬と。夜と昼と。雨降る日と照る日と。人の笑ふと腹立つと。老いたると若きと。白きと黒きと。思ふ人とにくむ人と。
(新全集 一二三頁)

これは、対照的なものについて述べている段である。傍線部では、人が笑うことと人が腹を立てることは、対照的なものとして見なされていることがわかる。謀ることと謀られること、即ち騙し騙されることを全て愉快と捉えられることはできない。騙す側が愉快に感じ、笑えたとしても、騙された側は言わば被害者で、多くは怒ったり、悲しんだり、恨んだりするという、対照的な反応が生じるのである。

本章ではまず、「謀られる者」が騙された被害者のままであり、「謀る者」と「謀られる者」の関係が最後まで変化しない話を取り扱う。「謀る者」と「謀られる者」は、話中で立場が逆転するものもあるが、ここでは謀ること、謀られることがどのようにつえられ、いたのかを考察するため、まずはこれらの関係性が単純なものを考察していく。

第一節では謀る者が一方的に笑う話を、第四話「尾張守□五節所語」、第三十話「左京属紀茂経鯛荒巻進大夫語」の二例を取り上げ、登場人物の反応、行動に注目しながら考察する。第二節では、謀った者も謀られた者も一緒になって笑うという話として、第五話「越前守為盛付六衛府官人語」を考察し、「謀り」の成功によって生じる笑いの構図を明らかにする。

第一節 謀った者の一方的な笑い

まずは、謀った者だけが愉快を味わい、笑う話を①「若キ」人々による「謀り」と②「物云」による「謀り」に分類し、それぞれについての笑う者と笑われる者の反応を確認する。

第一項 「若キ」人々による「謀り」

「謀り」の成功により、騙した者だけが一方的に笑う「謀り」話としては、第四話「尾張守□五節所語」、第三十話「左京属紀茂経鯛荒巻進大夫語」などが挙げられる。これらの「謀り」は、「若キ殿上人共」や「若キ侍」など、血気盛んないたずら好きの若者達によるものである。

①第四話「尾張守□五節所語」の場合

まず、第四話「尾張守□五節所語」は、田舎者の尾張守を嘲笑する若い殿上人達によるいたずら話である。以下に梗概を示す。

尾張守は、「本ヨリ物ノ上手」という才覚のある者で、五節の役³という大変名譽な役を任された。五節所⁴を素晴らしく飾り付けたことから『極カリケル物ノ上手ニコソ有ケリナリ』ト、皆人□讚ケル」と、器用なこと、豪華に飾り付ける財力を殿上人達に褒められていた。しかし、宮中の作法に暗い尾張守一族の、些細なことを知りたがったり、殿上人達を必要以上に恐れたりする様子は、殿上人達にとって馬鹿げたものに見えた。そこで、若い殿上人達は、尾張守を謀る計画を立てるのであった。

次に、若い殿上人達の謀りの内容を本文から確認する。^①

若キ殿上人共、宿直所ニ□居テ、各云タル様、「此ノ尾張ノ五節所ハ物^②色ナド微妙クシ立タル物カナ。童傳モ今年ノ五節ニハ此レゾ勝レタル。但シ、此ノ守ノ一家ニ内辺ノ事ヲ未ダ聞ニモ不聞ズ、亦不見ザリケレバ、露ノ事ヲ恋ガリテ追シラガヒテ出テ見ル。亦我等ニ恐レテ、近ク寄レバ、隠レ騒グハ、嗚呼ニ極キ物カナ。」^③去来、此ノ謀テ、弥ヨ恐シ迷ハサム。何ガ可為キ」ト。：亦或ル殿上人ノ云ク、：「此ノ五節所ヲバ殿上人達極ク咲フゾ。然カ知リ給ヘ。此ノ五節所咲ハムトテ殿上人達ノ

謀ル様ハ、有ト有ル殿上人此五節所ヲ恐サムトテ、皆紐ヲ解テ欄表衣ヲ脱下テ、五節所ノ前ニ立並テ、歌ヲ作テ歌ハムト為ル也。其ノ作タル様ハ、

鬢タ、ラハアユカセバコソヲカセバコソ愛敬付タレ

ト。「鬢タ、ラ」ト云ハ、守ノ主ノ毛清ク鬢ノ落タルヲ、此ル鬢タ、ラシテ五節所ニ、若キ女房ノ中ニ交リ居給タルヲ歌ハムズル也。「アユカセバコソ愛敬付タレ」ト云ハ、守ノ後向テ歩ビ給ガ□ヤカナルヲ歌ハムズル也。此ク告申ス事ヲバ実トモ信ジ不給ハジ。其レハ、明日ノ未申ノ時許ニ殿上人藏人ノ有ル限り、皆編テ欄表ノ衣ヲ、皆要カラミテ、長若キトモ不云ズ、此レヲ歌ヒテ寄来ル者ナラバ、此ニ申ス事ヲ実也ケリト信ジ給ヘ」ト告ゲムト思フゾ」

(新全集 一六二〜一六三頁) 5

傍線部①からは、殿上人達が尾張守の五節所の飾りつけや童女、介添えなどを優れていると評していることがわかる。しかし、一転して波線部②では、尾張守一族のちよつとしたことを知りたがったり、殿上人たちを恐れて隠れ騒いでいる様子はひどく「嗚呼」などに見えろとして、尾張守一族の田舎者つぷりを馬鹿にしている。ここでの「嗚呼」は貴族視点から見ると、田舎者を侮蔑、嘲笑した言い方である。尾張守の能力は認めつつも、尾張守が田舎者であるという点においては、貴族は優位に立ち、笑うことができる。そのため、尾張守を騙して脅かし、怖がる様を笑おうとする計画を立てるのである。まず、傍線部③では「五節所ヲバ殿上人達極ク咲フゾ」、即ち五節所を殿上人たちはひどく笑っていますよ、と嘘を付くことで尾張守を動揺させようとする。そして、傍線部④では、「びんたたら」の歌をこじつけて解釈し、「鬢タ、ラ」を、尾張守の髪の毛が薄く、鬢が抜け落ちている頭で、五節所に若い女房たちに入り混じっている様子を歌っているのだとしている。さらに、「アユカセバコソ愛敬付タレ」は、尾張守の腰のまがって歩く様子を歌っているのだと、素知らぬ顔で嘘をついている。これらは能力ある田舎者に対しての若い殿上人による「いたずら」或は「嫌がらせ」であり、酷い悪ふざけの感がある。

また、このことを計画した殿上人達が、実際に五節所で「びんたたら」を歌う場面は以下のとおりである。

皆欄表ノ衣ヲ尻許マデ脱下タリ。皆手ツラカヒツ、寄来テ、寄懸リテ内ヲ臨シテ、五節所ノ前ノ畳首ニ或ハ杳ヲ脱テ居、或寄臥シ或ハ尻ヲ懸ケ、或ハ簾ニ寄懸リテ内ヲ臨リ、或ハ庭ニ立タテリ。亦皆諸音ニ此ノ鬢タ、ラノ歌ヲ歌フ。此ク恐ス事ヲ知タル若キ殿上人四五人コソ、簾ノ内ニ有ト有ル者ノ恐ヂ迷フ気色ヲ可咲トモ見レ、案内モ不知ザリケル長殿上人共ハ、此ク此ノ五節所ニ有ト有ル者共ノ恐テワナ、クヲ、極テ怪ト思ヒケリ。

(新全集 一六六頁) 30

鬢たたらを歌いながら乱舞する殿上人たちを見て、尾張守一族はますます騙され、これらを怖ろしがっている。傍線部①では尾張守を脅かす計画を知っていた若い殿上人たちは、簾の中で震え怖れている尾張守一族の様子を可笑しく思っていたとある。「謀り」が成功し、自分の思い通りに守達が恐れ戦く様は、「謀る者」である殿上人にとっては大変愉快なものであった。

次に、尾張守（謀られる者）の反応を確認する。
若い殿上人達に謀られ、騙されている尾張守の反応の本文を以下に示す。

（五節所襲撃の予告を受けて）「夜前君達ノ、此ノ歌ヲ歌ヒシヲ、『何ニヲ歌フニカ』ト怪ク思ヒシハ、然ハ翁ヲ歌ヒケルニコソ有ケレ。何ノ罪ノ錯ノ有レバ、此ク翁ヲバ歌ニ作テハ可歌キゾ。尾張ノ国ノ代々ノ国司ニ被亡テ失ニタルヲ、天皇ノ棄ガテラ成給ヒタレバ、『何ガハセム』ト思テ、極キ術ノ深ヲ、吉キ国ニ憩立テ奉ルガ悪キカ。亦此ノ五節奉ル事ハ、己ガ好テ望テ奉ルカハ。天皇ノ押宛テ被責レバ、難堪ケレドモ奉ニコソ有レ。亦鬢ノ無キ事ハ、若ク盛ナル齡ニ鬢ノ落失タラバコソ嗚呼ニモ可咲クモ有ラメ、年ノ七十二成タレバ、鬢ノ落失タラムハ可咲キ事カハ。…(中

50

45

40

35

30

25

20

15

10

略)：近來ノ若キ人ハ思遣モ無ク、此ク虚言ヲ為ル也。…(以下略)ト云テ、糸筋ノ様ナル脛ギヲ股マデ褰ゲテ、扇ギ散シテ嘖リ居タリ。

(新全集 一六四〜一六五頁)

まず傍線部①からは、何故自分が馬鹿にされなければならぬのかと憤慨する様子が読み取れる。守は荒廢していた尾張を再興し、安定させたという自信があり、馬鹿にされるようなことをしていないと思っている。「鬢たたら」の歌意は、「長く垂れた髪の毛を揺り動かし、歩く様子はかわいらしく魅力的であるよ」となるのだが、完全に殿上人の言葉に術中に嵌り、騙されている尾張守は、自分の髪の毛がないことを暗喩した歌だと勘違いし、怒っているのである。また、傍線部②では、最近の若い人は思いやりに欠け、このような出鱈目をするのだと嘆いている。最後に傍線③では、一連の長台詞に熱が入りすぎたのか、「糸筋ノ様ナル」細い脛を股まで捲り上げ、扇を仰ぎながら怒りを露わにしている。また、殿上人による襲撃が終わった後の守の発言は以下のとおりである。

守ワナ、クク、這出デ、篩音ニテ、「何デカ翁ヲコソ咲ヒ給ハス。帝王ノ御為ニ此ク無礼ヲ至セルハ、奇異キ事也。此ノ主達ハ必ず事有ナム者ノ。吉シ見ヨ、己等。天地日月□カニ照シ給フ神ノ御代ヨリ以來、此ル事無シ。国史ヲ見ルニ敢テ不記サズ。極ク成ヌル世ノ中カナ」ト仰ギ居タリケリ。

(新全集 一六七頁)

ここでも、大げさなまでに被害者ぶる守の様子が窺える。傍線部①でもやはり、どうして自分が笑われなければならないのかと怒り嘆いている。傍線部②では、このような出来事は国の正史を見ても例がないほどに酷い不祥事であるとし、天を仰いで嘆いている。しかし正史に不祥事が無いなどということはあり得ず、この発言によって尾張守の無知さ、即ち田舎っぼさが浮き彫りになる。田舎人は無知であり、それが貴族から見ると笑いの種となることは前提とされていた。また、正史に書かれているような重大な事を、自分が笑いものになっているという些細な事と同一視している点も滑稽である。それでも、尾張守は最後まで笑われる理由がわからず、自分が悪いとは思っていないのである。

尾張守のこの大げさな台詞と動作を見ていた人々は、「可咲」と思い、話は貴族や皇族にまで知れ渡り、守は「被咲ケル事無限シ」と徹底的に笑われている。騙した者やその周りの人が笑い、騙された者だけが「嗚呼」を演じて一人、悔しがったり怒ったり、嘆くという典型的な例である。

②第三十話「左京属紀茂経鯛荒巻進大夫語」の場合

同様に、第三十話「左京属紀茂経鯛荒巻進大夫語」もまた、騙した者だけが笑うという話である。これは、紀茂経という左京の属が、上司の機嫌をとろうと藤原頼通に献上された鯛の荒巻を贄殿から貰い受け、献上する計画を立てていたが、若い侍達によるいたずらで、荒巻の中身が古い草履などに入れ替わっていて恥をかき、上司の怒りまでかかってしまったという話である。

まずは、茂経(謀られる者)と若キ侍(謀る者)の反応と、謀りの内容について本文を確認する。

膳夫ノ有ルガ、此レヲ聞テ云フ様、「其ノ事ハ己コソ聞侍ツレ。己ガ壺屋ニ入居テ聞居テ侍ツレバ、此ノ殿ノ若キ侍ノ主達ノ、勇ミ寵タル数、贄殿ニ御シテ、間木ニ被捧タル荒巻ヲ見テ、『此ハ何ゾノ荒巻ゾ』ト被問ツレバ、誰ガ申ツルニカ有ラム、『此レハ左京ノ属主ノ御荒巻ヲ被置タル也』ト答ツレバ、主達、『然テハ可為キ様有』ト云テ、荒巻ヲ取下シテ、鯛ヲ皆取出テ切食テ、其替ニハ破タル平足駄ノ片足ヤ、旧尻切ノ壞タルヤ、古藁沓ノ切タルナドヲコソ求メテ、籠テ被置ル、ト聞侍ツレト語レバ、茂経此レヲ聞テ、嘖リ嘖ル事無限シ。其ノ嘖ル音ヲ聞テ、此シテル者共来ツ、咲ヒ嘖ル事無限シ。其ノ比ノ物語ニ、此ノ事ナム語テ人咲ケル。茂経其ノ後恥テ、左京ノ大夫ノ許ヘ否不行ズ成ニケリ。

50

45

40

35

30

25

20

15

10

5

ここでの真の仕掛け人は二重線部の「若キ侍ノ主達ノ、勇ミ寵タル数」であり、第五話同様複数の人々による「謀り」である。若侍たちの計略に嵌って騙された茂経は、傍線部①で「哭又許恨ミ喰ル事無限シ」と、激しい怒りや恨みを抱いている。茂経は、第五話の尾張守同様に何故自分が騙されなければならないのかと泣くほどに相手を恨むのである。一方の若侍達は、茂経の「嗔リ喰ル事無限」様子を見て「咲ヒ喰ル事無限シ」と大笑いをしており、ここでも、騙した者と騙された者が対照的な反応をしているのがわかる。

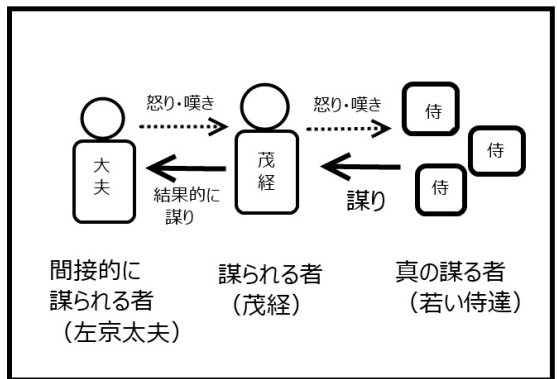
また、左京太夫（謀られる者）の反応はどのようなものだったのだろうか。左京太夫の台詞からは、笑われるということに對しての認識を確認することができる。

左京ノ大夫ノ云ク、「此ノ尊ハ本ヨリ此ク艶又物狂トハ知タレドモ、官ノ上ト思テ、常ニ来睦ビツレバ、吉トハ不思ネドモ可追キ事ニハ非ネバ、只、来レバ来ルト見テ有ツル也。其レニ、此ル態ヲシ出シテ量ヲバ、何ニカハ可為キ。物悪キ身ハ、墓無キ事ニ触レテモ此ク有ル也。何ニ、世ニ人聞繼テ、世ノ中ノ咲種ニシ、末ノ世マシ。デ物語ニセム」ト云ヒ次テ、空ヲ仰テ、「老ノ浪ニ極キ態カナ」ト、嘆クコト無限シ。

傍線部②では、世間の人の笑い種にされ、末代まで語りぐさにされることを嘆いている。ここから笑われることへの恥の意識がうかがえる。ここでの笑いは嘲笑であり、人々に馬鹿にされ、非難されて笑われることは恥ずべき事と考えられていたことがわかる。

傍線部①では、茂経を「本ヨリ此ク艶又物狂」と呼ばれている。左京大夫の機嫌を取ろうと「棍ル」様は、大夫にとって馬鹿馬鹿しく感じられた。茂経が若侍たちの「謀り」の標的となった理由は明記されていないが、上司に気に入られようとゴマをする態度が影響していると考えられる。また、二重線部では、茂経が左京大夫を謀ったと認識されている。茂経は上司を謀ろうとしたわけではなく、部下に謀られたことを嘆き、しかしここでは結果的に茂経が左京大夫を謀ったことになり、部下に謀られたことを嘆き、恥じているのである。ここでは、真に「謀る者」によって、「謀られる者」の茂経が「謀る者」とされ、直接的に若侍たちに謀られたわけではない左京大夫までもが「謀られる者」になっているという構図（【図四】）となっている。

【図四】第三十話における「謀る者」「謀られる者」の関係



ここでの真の「謀る者」は、若い侍たちである。その「謀り」によって、茂経が騙され、結果的に茂経の上司である左京大夫も茂経に騙されたような構図となっている。「謀られる者」である左京大夫や茂経は、「謀る者」に対して怒りを抱いたり、嘆いたりしており、被害者の態度をとっている。

第二項 「物云」による「謀リ」

「物云」による一方的な「謀リ」話としては、第八話、第九話などが挙げられる。

①第八話「木寺基僧依物咎付異名語」の場合

第八話「木寺基僧依物咎付異名語」は、中算という「物云ヒ」の僧が「木立」を「きだち」と態と言い誤り、それを「こだち」と言い咎めた基僧に「小寺の小僧」という不名誉なあだ名をつけることに成功した。その場にいた他の僧たちは基僧を笑い合ったという話である。

まずは、中算（謀る者）の謀りの内容と、周囲の反応を本文から確認する。

山階寺ノ僧中算ガ云、「哀レ、此ノ殿ノ木立ハ異新ニハ不似ズカシ」ト云ケルヲ、
傍ニ木寺ノ基僧ト云フ僧居テ、此ヲ聞クマ、ニ、「奈良ノ法師コソ尚疎キ者ハ有レ。
物云ハ賤キ者カナ。『木立』トコソ云へ、『木立』ト云フラムヨナ。後目タ無キノ言
ヤ」ト云テ、夫ヲハタ、トス。中算此ク被云テ、「悪ク申シテケリ。然ラバ御前ヲ
バ、『小寺ノ小僧』トコソ可申カリケレ」ト云ケレバ、有ト有ル僧共皆此レヲ聞テ
音ヲ放テ愕タ、シク咲ヒケリ。
其ノ時ニ、撰政殿此ノ咲フ音ヲ聞給テ、「何事ヲ咲フゾ」ト問ハセ給ケレバ、僧共
有ノマ、ニ申シケレバ、殿、「此レハ中算ガ此ク云ハムトテ、基僧ガ前ニテ云ヒ出
シタル事ヲ、何デカ心ヲ不得ズシテ、基僧ガ、案ニ落テ此ク被云タルコソ弊ケレ」
ト仰セ給ケレバ、僧共弥ヨ咲テ、其ヨリ後、小寺ノ小僧ト云フ異名ハ付タル也ケリ。
(新全集 一八三頁)

20

奈良の興福寺の中算は、「物云ヒナム可咲カリケル」僧であり、口達者であった。傍線部①は一見、「木立」を「きだち」と言い誤る失態のようにみえる。しかしこれは、傍線部②で基僧が中算の発言を非難することを予想した上でわざと失態をしたかのように振る舞っているのである。この予想通り「奈良法師の言葉遣いは卑しいものだ」、「こだち」を「きだち」などと言っているようすな」と皮肉る基僧に対し、傍線部③では「それではあなたのことは「小寺の小僧」と呼ばなければいけませんね」と返す。「木寺の基僧」の「き」を「こ」に改めて、「小寺の小僧」と、貧乏な小さな寺の小僧の意を表す語に変えることで痛烈にやり返している。これを聞いた周囲のあらゆる僧達は、大声をあげて笑った。中算の反応は本文中にないものの、「謀リ」が成功したことにより、内心笑っていることが推測できる。ここでは、「謀リ」の成功によって中算自らの「物云」を披露することができ、この二重の効果が笑いをより一層大きなものにしていてと考えられる。

30

また、この笑い声を聞いた撰政殿は、中算の謀りを予想できずに不名誉なあだ名がつくことになった基僧に対し、「弊ケレ」と述べている。「つたなし」には愚かであるという意の他、運が悪いという意もあり、ここではどちらの意でも解釈できるが、ここで重要なのは「謀リ」を予想できなかったこと、即ち中算との知恵比べに負けてしまったことが基僧の命運をわけることになっているという点である。「謀リ」を予想し、失態を演じず笑われ者にならないようにするのが、この場においては特に求められていたことであるとも考えられる。

40

次に、基僧（謀られる者）の反応も確認していく。中算の計略に嵌った基僧は、

『無端ク物咎メシテ、異名付タル』トテナム、基僧悔シガリケル

(新全集 一八四頁)

と、中算の策略に気づかずにつまらない咎め立てをし、不名誉なあだ名をつけられたことを悔しがっている。中算の策略に乗ってしまったのは自分の不注意であり、自分の非を認めているために中算を強く恨んだり、怒ったりする様子は見られない。また、笑いの構図としては、騙された基僧一人が悔しがり、騙した中算やその周辺の人が大勢で笑うというもので、第一項で考察した「若キ」人々による「謀リ」話と同様である。

45

50

②第九話「禪林寺上座助泥 破子語」の場合

また第九話「禪林寺上座助泥 破子語」は、禪林寺の僧正が破子を三十荷集めるよう「物可咲シフ云フ者」の助泥に依頼したが、助泥は初めから集めるつもりがなく、当日になって何も準備できなかったことを言葉巧みに言い逃れその場から逃走するといういたずら話である。助泥が破子を準備できなかったと言いつつ、諷刺する場面では、「シタリ顔」や演技がかった行動が見受けられる¹⁾。

まずは、助泥（謀る者）と僧正（謀られる者）の反応を確認する。
助泥に謀られた僧正の反応と、それを見た助泥の反応は以下のとおりである。

僧正、「物ニ狂フ奴カナ。催サマシカバ、四五十荷モ出来ナマシ。此奴ハ何ニ思テ此ル事ヲバ闕ツルゾ」ト問ハムトテ、「召セ」ト惶シリ給ケレドモ、跡ヲ暗クシテ

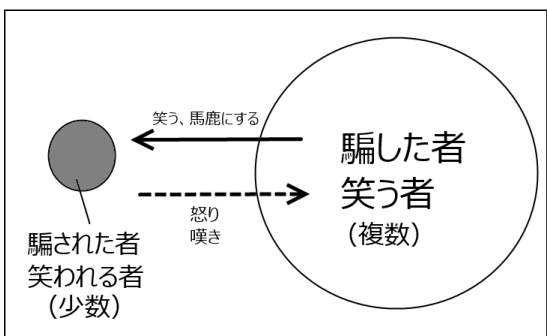
逃テ去ニケリ。²⁾（新全集 一八六頁）

傍線部①は、助泥を呼び戻すように大声を上げている僧正の様子である。僧正の感情を表す語は記されていないが、必要な破子が助泥のいたずらによって揃わなかったのだから、程度の差はあれ怒りを抱いたと推測できる。また、傍線部②で助泥はその場から逃走している。その場からの逃走は、自分自身の恥を感じて逃走する場合と、その場から逃走して隠れて笑うという場合があるが、この場合は後者だと推測できる。助泥は「謀リ」と「物云」を成功させ、愉快に思っている。「謀リ」をされた「謀られる者」は、怒りや嘆き、悔しさを覚えると先に述べたが、「物云」をされた者は、渡辺麻里子氏が指摘しているように、「苦々しくもどこか許し、「厳罰」に及ぶことがない」のである³⁾。「物云」の巧みな仕掛けによって失態を演じることは、不本意ではあるものの自分の不注意や自分の非であると認められ、怒りや嘆きといった感情が緩和されると考えられる。

ここまで、「謀る者」として、「若キ」人々によるものと、「物云」と呼ばれる人による二通りを考察した。いずれも、「謀リ」の成功によって、騙された者を一方的に笑うことができる。この笑いは、「謀リ」の成功によって相手を陥れ、自分が優位に立っているという笑いである。

騙された者は、第四話の尾張守のように「本ヨリ物ノ上手」と、本来は褒められるべき人でも田舎者であることで騙された。一方で、第三十話のように「本ヨリ此ク艶又物狂」と呼ばれる者もいたが、共通して言えることは「謀リ」に途中で気づくことができなかつたということである。また、「謀る者」が「謀リ」の成功によって一方的に笑うのに対し、「謀られた者」は怒り、嘆き、恨みを抱く。しかし、「物云」による「謀リ」においては、「物云」の巧みな仕掛けによって、多少この怒りや悔しさが緩和されている。

【図五】 謀った者の一方的な笑い



若き人々による「謀リ」は全て、「謀られる者」が一人であるのに対し、「謀る者」が複数存在した。この「謀リ」は悪ふざけの感が強く、成功することで相手より優位に立って笑うことができる。「謀リ」をしていない周囲の人々は、笑うことはない。以上を示したのが【図五】である。

一方、物云による「謀リ」は、「謀る者」が一人であった。「謀リ」の成功は一方で「物云」の成功でもあり、「謀られた者」は口惜しさを抱きながらも、どこか「謀る者」の見事な「謀リ」の手腕を認め、本気で怒りを感じているわけではない。また、「謀る者」の巧みな仕掛けによって無関係の周囲の人々が笑っていることで、笑われる者と笑う者の人数としては、【図五】に示したものと同様である。

第二節 謀られる者の笑い

これまで、騙した者だけが愉快を味わう話を考察してきた。しかし、『今昔物語集』巻第二十八には、謀られた者、騙されて酷い目に遭った者までもが一緒にあって笑う話がある。以下に梗概を示す。

第五話「越前守為盛付六衛府官人語」

越前守為盛朝臣は、六衛府の下級官人に納めるべき大粒米を納めなかった。それに怒った官人達は為盛の家に押しかけ、米を納めるように要求し、屋敷の前に居座った。酷暑の日であったので、官人たちは喉が乾ききっていた。その時先ず、左右の近衛府の官人が屋敷に通された。為盛は塩辛い肴と共に酒を振る舞った。この酒には下剤が含まれていたのだが、喉が渴ききっていた所に、塩辛いものばかりを出されたので、近衛の官人達は酒を喉の渇くまま飲み干した。その後集団で下痢症状を起こした官人たちは、「自分たちが酒を飲んだのが悪かったのだ」と言って笑いながら逃げ帰った。為盛は物云で人を笑わせる馴者と呼ばれる老獺な翁であったため、このようなことをしてかしたのであった。

第一項 為盛朝臣(謀る者)の謀り

為盛朝臣の「謀り」の内容部分を確認する。

早ウ、此ノ為盛ノ朝臣ガ謀ケル様ハ、「此ク熱キ日、平張ノ下二三時四時¹³ 炮セテ後ニ呼入レテ、喉乾タル時ニ、李、塩辛キ魚共ヲ肴ニテ、空腹ニ吉クツゞシリ入サセテ、酸キ酒ノ濁タルニ、牽牛子ヲ濃ク摺入レテ吞セラバ、其奴原ハ不痢デハ有ナムヤ」ト思テ、謀タリケル也ケリ。

(新全集 一七四頁)

為盛朝臣が謀るには、「六月許ノ極ク熱ク日長ナル」という非常に暑い夏の日に、天幕を張った所に六々八時間茹だらせた後、官人達を屋敷内に呼び入れ、喉が乾ききったところに李や塩辛い食べ物をおわせて、空腹に十分食わせる。そこに、下剤となる朝顔の種を磨り下ろしたものを入れた酸っぱい濁り酒を飲ませれば、官人達は腹を下さずにはいられないだろうということである。

そのために、為盛朝臣はまず「長ナル侍」を官人達の元に遣わす¹⁴。

家ノ門ヲ細目ニ開テ、長ナル侍頸ヲ指出テ云ク、「守ノ殿ノ、『申セ』ト候フ也。『須ク疾ク対面給ハラバ欲ケレドモ、事ノ愕シク被責レバ、子共女ナドノ恐デ侍レバ、否対面シテ事ノ有様モ申シ不侍又ニ、此ク熱キ程ニ、無期ニ被炮給ヒヌラムニ、定テ御咽共モ乾ヌラム。亦、『物超シニ対面シテ、事ノ由ヲモ申シ侍ラム』ト思給ルヲ、『忍ヤカニ御坂ナド参セム』ト思フハ何ガ。便不無マジクハ、先ヅ左右近ノ官人達舍人ナド入給へ。次々ノ府ノ官人達ハ近衛官ノ人達ノ立給ナム後ニ可申シ。一度ニ可申ケレドモ、怪ノ所モ糸狭ク侍レバ、多ク可群居給ヌベキ所モ不侍ネバ也。暫シ待給へ。先ヅ近衛官ノ官人達入給ナムヤ』トナム侍ル」

(新全集 一六八〜一六九頁)

傍線部①の「長ナル侍」は、年配の分別がありそうに見える侍の意である。官人達は為盛が何かを仕掛けてくることは予想できていたが、既にこの人が為盛に遣わされた「謀る者」となっていることは予想できなかった。即ち、この「長ナル侍」に対しては何も警戒することなく、話を聞いてしまったのである。「長ナル侍」は為盛の「謀り」を成功させるための必要な要素となっている。傍線部②「便不無マジクハ」では差支えなければと下手に出ながら相手を巧みに誘導している様が確認できる。また、家の中は狭く、大人数が入れる場所ではないと理由をつけて、近衛府の官人達だけを先に家の中に入れることに成功する。そして、計画通り塩辛いものを食わせ、下剤入りの酒を飲ませる。そこによりやく、為盛が登場する。

守簾超ニ居ザリ出テ云ク、「心カラ物ヲ惜ムデ、其達ニ此ク被責申シテ、恥ヲ見トハ何デカ可思キ。彼ノ国ニ、去年旱魃シテ、露微得ル物無シ。適マ露許得タリシ物ハ、先ヅ止事無キ公事ニ被責シカバ、有限り成シ畢テ、努々残物無ケレバ、家ノ炊料モ絶テ侍。女^②童部ナドモ餓居テ侍ル間ニ、此ル間恥ヲ見侍レバ、可然キ事思テナム侍ル。先ヅ其達ノ御料ニ墓無キ当飯ヲダニ否不参セ又ニテ押し量リ給へ。前生ノ宿報弊クテ、年来官ヲ不給ラデ、適マ亡国ニ罷成テ、此ク難堪キ目ヲ見侍ルモ、人ヲ可恨申キ事ニモ非ズ。此レ、自ノ恥ヲ可見キ報也」ト云テ、哭ク事極シ。

(新全集 一七一頁〜一七二頁)

10

ここで、為盛の「物云」と演技が披露される。まず傍線部①では、昨年干ばつに遭い、少しも租税となる米を集められなかったと語る。たまたま少し手に入れた米は院や天皇などの尊い人々に献上してしまつて何も残つておらず、家の分も無くなつてしまつたために、召使いの女童までもが腹を空かせている始末であり、これを恥であると考えていると述べている。当然これは為盛の「謀リ」なのだが、同情を誘つた語り口で官人達は騙されてしまう。また、傍線部②では、官人達へほんの少しのご飯すらも出すことができないことを察してほしいと頼むことで、塩辛い肴だけであつたこともその裏付けとしてしまうのである。また、このような目に遭うのは自分が恥を見るべき宿命なのだろうといつてひどく泣く。為盛の同情を誘う演技に官人達は騙され、為盛の「謀リ」は成功する。本文中では為盛が笑つたかどうかの記述は見られないが、第一節でも「謀リ」の成功によつて「物云」が笑つている記述は無かつた。心情としては「謀リ」の成功に満足し笑つているが、「物云」の最中のため、その場では笑つてはいないと考えられる。

20

第二項 官人達(謀られる者)の反応、話を聞いたの人々の反応

「謀リ」の仕掛け人、つまり騙す人である為盛は、「極タル細工ノ風流有物ノ、物云ヒニテ人咲ハスル馴者¹⁵ナル翁」「極タル風流ノ物ノ上手」と呼ばれている。ここでの「風流¹⁶」は、諸注に従い、機知に富んだ思いつきをし、芸の細かいたくらみをする者と解釈する。

25

本話について土井氏は、「守が『極めたる細工の風流ある者』『極めたる風流の物の上手』と繰り返し賞賛されているように、その笑いは「風流」と呼ばれるありようがひとつひとつの心に喚起する愉快さであり、仕掛けの巧みさへの賞賛の念に伴う快である」と述べている¹⁷。

30

また、本文中の官人の発言や行動を確認する。

【i】暫許有レバ、兼時、「白^{あから}地ニ罷立ツ」ト云テ、^{いそぎ}忿テ走ル様ニテ行ヌ。其レヲ見テ、兼時ガ立ツニ付テ、異舎人共追シラガヒテ座ヲ立テ走り重ナリテ、板敷ヲ下ルニ、^{或ハ長押ヲ下ル程ニ、ヒチメカシテ垂懸ケツ。}或ハ車宿ニ行テ、着物ヲモ不解敢ズ痢懸ル者モ有リ。或ハ亦疾ク脱テ^{かひげ}褰テ、^{はんざふ}椽ノ水ヲ出スガ如クニ痢ル者モ有リ、或ハ隠レモ不求敢ズ痢リ迷タリ。

(新全集 一七三頁)

40

【ii】如此クスレドモ互ニ^{あから}咲合テ、「然ハ思ツル事ゾカシ。『此ノ翁共¹⁸墓¹⁹シキ事不為セ²⁰、必ズ怪ノ事出シテム』トハ押量ツル事也。何様ニテモ守ノ殿ハ憎クモ不御ズ。我等ガ酒ヲ欲ガリテ吞ガ至ス所也」ト云テ、皆咲ヒテ腹ヲ病テ痢合タリ。

(新全集 一七三頁)

45

【iii】而ル間、門ヲ開テ、「然ハ出給へ。亦次々ノ府ノ官人達入レ申サム」ト云ヘバ、「吉キ事ナ、リ。疾ク入レテ亦己等ガ様ニ痢ヨヤ」云テ、袴共ニ皆痢懸テ巾ヒ繚テ、追シラガヒテ出ルヲ見テ、今四ノ府ノ官人共ハ、咲テ逃テ去ニケリ。

(新全集 一七三頁)

50

【i】は、下剤入りの酒の効果で腹を壊し、そこかしこで下痢をして惑い苦しむ官人達の様子である。為盛に騙され、散々な目に遭った官人たちであるが、彼らは為盛へ嫌悪を感じたり非難してはいない。

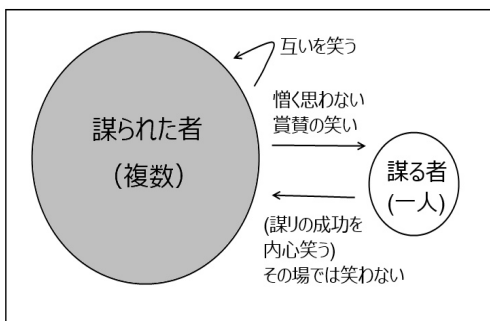
まず、【ii】波線部では、互いに笑い合っている官人達の様子が窺われる。傍線部①「共」は、親しみの意を表す語であり、為盛に親しみを感じていることがわかる。また、傍線部②「憎クモ不御ズ」は、憎くは思えない、憎くはないという意味である。それどころか、傍線部③「我等ガ酒ヲ欲ガリテ吞ガ至ス所也」と、自分たちが酒を欲しがったのが悪かったのだと言って笑い合っている。この笑いは、二重線部にある通り、為盛朝臣が何かを仕掛けてくるのは予測できたにも関わらず、それでも計略に嵌ってしまった自分自身への自嘲と、予想通り巧妙な罠を仕掛けてきた為盛への賞賛の笑いと、下痢をまき散らすという醜態を晒しているお互いに対する嘲笑の三つの笑いである。また、この発言からは、騙されることは自分の知恵のなさの現われであり、自己責任であるという考えが窺われる。このことから、騙されることを予想し、回避することが求められていたのではないかと考察する。

「謀り」をされた者、つまり騙された者が、自分が騙されたと気づきながら笑う話は本話以外には見られない。普通は騙されたと気づけば怒りや憎しみの気持ちが生じる。「物云」の巧みな仕掛けには怒りや憎しみを緩和する効果があることを先述したが、「謀られた者」が笑うという描写は見られなかった。騙されても尚笑うことができるということは、「極タル風流ノ物ノ上手」の「物云」である為盛の見事な仕掛けへの最大の賞賛と好意だと考えられる。

また、【iii】の傍線部①は為盛の屋敷から出てきた近衛府の官人達の様子である。外で待っていた四衛府の官人達に屋敷の中に入るよう促すのを聞いて、自分たちのように下痢をさせてやれと言いながら、我先にと屋敷から飛び出している。この様子を見て、波線部では四衛府の官人たちが笑いながら逃げ出している。初めは近衛府の官人のひどい有様を見て嘲笑するのだが、すぐに自分たちも同じ目に遭うと知る。つまり人ごとでは済まされない事態が迫っているため、その場から逃走している。また、為盛が何か仕掛けてくることは近衛府の官人同様に予想できたことであるため、予想通り巧みな仕掛けをしてきた為盛に対しても笑っていると考えられる。

また、笑い笑われる構図としては、第一節で取り上げたものとは対照的である。【図②】「謀られた者が一人、謀られた者が複数となっている。謀られた者が複数いたことで、互いの滑稽さを笑うことができたと考えられる。笑いは大勢であればあるほど効果が大きくなる¹⁹⁾。このことは、第一節で「謀る者」が複数である場合、「謀る者」のみが笑うという点において共通である。

【図六】



第一節では謀られた者（＝笑われる者）が一人、謀る者（＝笑う者）が複数であったのに対し、本話では謀る者と謀られる者の人数が対照的である。

また、この話を聞いた当時の人々は、

由無キ^{*20} 人ノ許ニ行テ、舎人共辛キ目ヲ見タリトテナム、其ノ時ノ人^{ウツクヒケル}ウツクヒケル。

(新全集 一七四頁)

5

と語っている。「由無キ」は「無意味な」などと解釈できるが、ここでは究極の仕掛け人である為盛の所に行ったところでも何もできずに帰る羽目になるので無意味ということである。為盛の元でひどい目に遭った官人達への哀れみの混じった笑いである^{*21}。

10

小結

謀りの成功によって生じる笑いについて考察した。第一節では、謀る者だけが笑える例として、若者たちによる謀り、物云による謀りの二つを考察した。謀られた者は「嗚呼」
|| 失態を演じ、笑われる者となる点、謀る者に対して怒ったり、嘆いたり、悔しがったりする反応は共通していた。「謀り」の内容は、若者によるものは悪ふざけの感が強く、謀られた者はいわば被害者であった。一方、「物云」による「謀り」は、悪ふざけではあるものの「謀り」の成功が巧みな「物云」を披露し、成功させる場ともなっていた。そのため、「謀られた者」は相手のあまりに見事な仕掛けに圧倒され、真剣に怒ったり、恨んだりする様子は見られなかった。また、いずれも、謀られた者は一人、謀ったものは複数であった。若き者はその場で笑うのに対し、「物云」はその場で笑わないことが確認できた。

20

第二節では、謀られた者も笑っている話として第五話「越前守為盛付六衛府官人語」を考察した。謀られた者はひどい目に遭いながらも、謀ったものを憎いと思うことはなく、寧ろ「謀り」を予想しつつも騙されてしまった自分たちが悪いとしている。このことから、当時騙されることを予想し、回避できる能力が求められていたのではないかと考察できた。また、第一節の例とは逆に、謀られた者は複数、謀ったものが一人であった。そのため、謀られた者同士が互いを笑い合うことができたと考えられる。

30

「謀り」の成功で生じる笑いの多くは、「謀る者」の笑いであった。しかし、為盛のような「極タル風流」による仕掛けでは、騙された側でさえも笑ってしまうことがある。このように巧妙な仕掛けのできる奇抜な発想力や、上手く世を渡り歩くことのできる智恵を持つ者は人々に賞賛され、好意を持たれる。

35

*1 清少納言の随筆文学。成立は10世紀末〜11世紀初頭の、長保年間と考えられている。伝本によって本文に相違があり、大別して三巻本・能因本を雑篇本、堺本、前田家本を類纂本と呼ぶ。ここでは、『新編日本古典文学全集』を用いているため、能因本での本文である。

*2 「たとしへなし」は、たとえようもないさま。比較を絶しているの意。『角川古語大辞典』より引用した。

*3 新嘗祭の余興に演ずる五節の舞の舞姫を出す役を当てられたこと。五節会は、古代、宮廷で行われた五つの節会のこと。元日節会、白馬節会、踏歌節会、端午節会、新嘗祭の翌日に行われる豊明節会がある。まず出演の舞姫が決められ、十一月の中の丑の日に、五節

参入で天皇が舞姫の下見をし、寅の日には舞姫の天覧があり、侍臣などの五節乱舞もあって「びんたたら」を歌い、「万歳楽」を舞う。卯の日には五節童女御覧があり、寅の日および卯の日には淵酔という一種の無礼講的酒宴行事が行われ、公達等が朗詠、催馬楽、今様などを歌って乱舞する。午の日には、はじめて公式に舞姫が群臣の前に舞姿を現す。『国史大事典』を引用した。

*4 五節の舞姫の控える場所。

*5 新全集注一六には『綾小路俊量卿記』五節間郢曲事、『建武年中行事』によれば、丑の日に后町（常寧殿）の廊、つまり五節所の前で、殿上人たちが「びんたたら」の郢曲を歌って乱舞するしきたりがあった。これを利用して、無知の尾張守一家を脅かそうとしたもの」とある。

*6 『今昔物語集』卷第二十八には、ひどい悪戯をしたり、物笑いをする「若キ」人々が多数登場する。第二十四話の若い殿上人、第三十話の若き侍などがそうである。対する「長立タル」人々は「謀リ」や物笑いはしない。第三十八話の「長立タル御目代」など。

*7 「量ル」は「謀ル」と同意。欺いたり、騙したりすること。

*8 「をこつる」は、だまし誘う。機嫌をとるの意。『角川古語大辞典』を参考にした。

*9 興福寺の別称。興福寺は、大和国（現在の奈良県）に所在する法相宗大本山。南都七大寺の一つ。もと藤原鎌足の山城山階邸に始まることから、山階寺とも呼ばれた。平安・鎌倉時代を通じて法相教学の中心道場としての地位を占めることとなった。『国史大辞典』を参照した。

*10 爪はじきをするの意。手のひとさし指か中指の先端を親指の爪にあて強く弾いて音をだすこと。非難や軽蔑を表すしぐさ。『日本国語大辞典』を参照した。

*11 助泥が僧正に破子を集められなかった理由を述べる場面。「助泥袴ノ扶ヲ上テ、扇ヲ開キ仕ヒテ、シタリ顔ニテ出来タリ。僧正此ヲ見給テ、「破子ノ主、此ニ来ニタリ。極クシタリ顔ニテモ来カナ」ト宣ヒケルニ、助泥、御所ニ参テ、頸ヲ持立テ候フ。僧正、「何ゾ」ト問給ヘバ、助泥、「其ノ事ニ候フ。破子五ツ否借リ不得候又也」トシタリ顔ニ申ス。僧正、「然テ」ト宣ヘバ、音ヲ少シ短ニ成シテ、「今五ハ入物ノ不候又也」ト申ス。僧正、「然テ今五ツハ」ト問給エバ、助泥音ヲ極ク窃ニワナ、カシテ、「其レハ搔断テ忘レ候ニケリ」ト申セバ。三度も得意顔という意味の「シタリ顔」が使用されている。また、声の調子を低くしていく様子、助泥の演技である。

*12 渡辺麻里子『今昔物語集』卷二十八第一話「近衛舎人共稻荷詣重方値女語」試論―卷二十八の主題と巻頭話としての意味―（『朱』五十四、二〇一一年三月）による。

*13 一時は二時間。三時四時で「六く八時間」の意。

*14 新全集注一四には「かなり年配の侍。この人選は越前守の深慮による」とある。

*15 「馴者」は『今昔物語集』内には卷二十八にのみ使用される語。新全集注七には「世態・人情に精通した老人。老練達者な年寄り。」とある。本話の他に「馴者」と言われているのは第六話「歌読元輔賀茂祭渡一条大路語」の清原元輔がいる。

*16 新全集注七では「念の入った思いつきをする者。芸の細かいくらみの名手」、新大系注三三では「機知に富み、手のこんだ仕掛けをする者」とある。また、『今昔物語集』卷第二十四話「女人依心風流得感心成仙語」には「本ヨリ心風流」の女人がおり、新全集注では「心操が清浄堅固で、超俗的なさま」、新大系注では「俗を離れ、清廉・潔白な心」とある。本話の用例とは異なるが、「風流」であることを賞賛していることは共通する。

*17 前掲注2論文による。

*18 新全集注三五に、「共」は親しみの意を表す接尾辞とある。

*19 ベルクソンは『笑い』（岩波文庫、一九三八年）において、「我々の笑いは常に集団の笑いである」とし、「見物客が詰まっていればいるほど、劇場において笑いは広がる」と述べている。

*20 「由無キ」はつまらない、無意味なの意。

*21 土井廣子氏は、「嘲笑の行方―『今昔物語集』卷第二八をめぐる―」（『東洋女子短期大学紀要』三二、二〇〇〇年三月）において、「人々は他者のさまざまな窮状を「いとほ

し」と受け止めながら、笑いを禁じえないのである。あるいは「いとほし」という受け止め方もあることを思いつつ、笑うのである。笑われる窮状は、多くの場合とりもおさず「いとほし」い窮状である。人が人を笑う事態は多かれ少なかれこの両義性を帯びている」と指摘している。為盛の元で散々な目に遭った官人たちの話は可哀想と思いつつも、笑ってしまうということが言える。

第三章 謀りの失敗がもたらす笑い―謀る者と謀られる者の 逆転

本章では、「謀り」の失敗がもたらす笑いについて、ここでは特に、第十八話「金峰山別当食毒茸不酔語」を中心に、第二十四話「穀断聖人持米被咲語」も例に挙げ考察する。『今昔物語集』巻第二十八において、「謀り」が失敗する例は少ないが、これらの二例は、「謀り」の失敗譚でありながら、本文中で「謀る者」と「謀られる者」の立場が逆転し、笑い笑われる者の立場が逆転するという複雑な構図を持つているため、「謀り」による笑いを考察する上で重要であると考える。

第一節では、「謀り」の内容と問題点をそれぞれの話について整理する。第二節では、「謀り」の失敗によって生じた笑いとして、二例に共通する「頬咲ム」という語を通してこの笑いの意味を考察する。第三節では、笑われる者の行動として特徴的なその場からの逃走を考察し、笑い笑われる構図を明らかにしていく。

第一節 謀りの内容と謀る者の行動

ここでは、第十八話「金峰山別当食毒茸不酔語」を中心に、謀りの内容と謀る者の行動を考察する。第一項では、本文中から第十八話の「謀り」の内容を確認し、問題となる点を整理する。第二項では、二人の「謀る者」の行動を通して、話中で登場人物の立場がどのように変わっていくのかを確認する。第三項では、第二十四話との比較を行い、共通点や相違点を探る。

第一項 「謀り」の内容と問題点

『今昔物語集』巻第二十八第十八話は以下のような話である。

【梗概】

金峰山の別当は八十歳を過ぎていても尚健在であった。次に別当になるはずの二臈の老僧はこのことに業を煮やし、和太利という毒茸を使って別当を殺害する計画を立てる。和太利を平茸と偽り、美味に調理して食べさせたところ、別当は微笑みながら「このように美味しく調理された和太利を食べたのは初めてだ」と言って、死ぬ気配もない。別当は常日頃からこの茸を好んで食べており、毒に免疫があったのだった。二臈の老僧はこれを恥じ、何も言えずに奥に引っ込んで隠れてしまった。

本文から、二臈の老僧の「謀り」が確認できる部分を確認する。

「三宝ノ思食^①ム事ソ怖シケレドモ、然リトテハ何ガハセム」ト思テ、其ノ毒ヲ思ヒ廻スニ、「人ノ必ズ死ヌル事ハ、茸ノ中ニ和太利ト云フ茸コソ、人其レヲ食ヒツレバ、酔テ必ズ死ヌル。此レヲ取テ艶ズ調美シテ、『平茸ゾ』ト云テ、此ノ別当ニ食セラバ、必ズ死ナムトス。然テ、我レ別当ニ成ラム」ト謀テ、秋比也ケレバ、^②人ヲ人モ不具ズシテ、山ニ行テ多和太利ヲ取り持来ニケリ。生夕暮方ニ房ニ返テ、人ニモ不見セズシテ、皆鍋ニ切入ツ、煎物^③ニ艶ズ調美シテケリ。

(新全集 二〇五頁)

二臈^③の老僧が、別当の毒殺を謀っている場面である。傍線部①では、和太利^④は人が食べるに必ず中毒症状を起こして死亡する毒茸だと当時から認識されていたことが確認できる。和太利(ツキヨタケ)はヒラタケ、シイタケに見た目が似ているため、ヒラタケと偽ることは容易である。

【資料一】和太利（ツキヨタケ）



【資料二】ヒラタケ



（検索入門 きのこ図鑑より引用）

『今昔物語集』卷二十八には茸に関する話がいくつか見られる。前話の第十七話「左大臣御読経所僧醉茸死語」は平茸を食べて頓死する僧の話である。平茸と間違えて毒茸を食べてしまったと推測できる。また、後話の第十九話「比叡山横河僧醉茸誦経」も同様に、平茸と何かの毒茸を勘違いして食べ、ひどい中毒症状を起こす話である。平茸と毒茸を間違えて食べるという話は珍しい話ではなかったようである。

この和太利を美味に調理し、平茸と偽って食べさせれば、別当を毒殺でき、自分が次の別当になることができるという計画である。

ここで問題点を整理する。問題となる点は三点ある。まず第一に、二臆の老僧は、そもそも僧という身でありながら、自分が別当になりたいという欲望のために、人を殺害しようとしている点があげられる。点線部では「三宝ノ思食サム事ゾ怖シケレ」と仏がなんと思ふかが怖ろしいと述べながらも、毒殺を計画することは、僧としてのあるべき姿から大きく外れている。規範やあるべき姿から大きく外れた者は笑われることになる。第二に、この「謀り」は、第一章で考察してきたような酷い悪戯ではなく、生死に直接関わる問題である点があげられる。渡辺麻里子氏は『今昔物語集』の特徴として「生死に関わることには厳しく、死に至る行動には、ことごとく批判的である」ことを述べている。第三に、

自分より身分の高い者である別当を騙しているという点が問題である。前田雅之氏は、『今昔物語集』の特徴として身分的序列意識を尊ぶということを指摘しており、下位の者が上位の者を脅かすことを好まないとする。これら三点はいずれも『今昔物語集』内で容認されない行為であることに注目したい。

第二項 「謀る者」と「謀られる者」の立場の逆転

また、二臆の行動に注目して本文を確認する。

生夕暮方ニ房ニ返テ、人ニモ不見セズシテ、皆鍋ニ切入^③、煎物ニ艶ズ調美シテケリ。……(中略)……房主^(筆者注…二臆の老僧)指向ヒ居テ云ク、「昨日、人ノ微妙キ平茸ヲ給ヒタリシヲ煎物ニシテ食セム、トテ申シ候ヒツル也。年老テハ此様ノ美味ノ欲ク侍

ル也」ナド語ラヘバ、別当喜テ打ウナヅキテ居タルニ、編ヲシテ、此ノ和太利ノ煎物ヲ温メテ、汁物ニテ食セタレバ、別当糸吉ク食ツ。房主ハ例ノ平茸ヲ別ニ構ヘテゾ食ケル。

(新全集 二〇五頁)

5

毒殺計画を確実に行うには、他人に見られたり、自分に疑いが掛かつてはならない。そのため、傍線部②「人モ不具ズシテ」、傍線部③「人ニモ不見セズシテ」では、老僧自らが一人で山に入り、自らが調理まで行っていることがわかる。また、傍線部④では、「人ノ微妙キ平茸ヲ給ヒタリシ」と、自分が採ってきた和太利を、他の人がくれた平茸と偽っており、これで毒殺が成功しても、自分に疑いがかかることはない。傍線部の別当は和太利をよく食べたことがわかり、毒殺計画は上手く成功しているかのように見える。

以上が「謀る者」としての二臈の老僧の「謀リ」と実際の行動である。

10

ここで、別当の行動に注目して、もう一度傍線部を確認する。別当は和太利をよく食べたのである。別当は、「年来和太利ヲ役ト食ケレドモ不酔ザリケル僧」であり、長年和太利を特に好んで食べていた。そのため、食べた瞬間、あるいは見た瞬間に、自分が食べている茸が平茸では無く和太利であり、毒茸を故意に食べさせてくる二臈の老僧は、自分を謀り毒殺するつもりなのだろうと気づいたと考えられる。しかしその瞬間には指摘せず、腹いっぱい食べる様子を見せることで老僧の計画がうまく運んでいるように見せかける。この時、大谷氏の指摘の通り、茸での毒殺を計画する二臈の老僧（＝謀る者）と、毒殺される予定だった謀られる者（＝一臈の別当）の立場が逆転している。別当が和太利の毒に耐性があることは、二臈の老僧にとっては想定外の出来事であり、「謀る者」であった自分が「謀られる者」となっていることには、この時点で気づかない。

20

第三項 第二十四話「穀断聖人持米被咲語」との比較

ここでは第二項までに確認した「謀リ」の内容と問題点、「謀る者」「謀られる者」の立場の逆転などを比較する。

25

『今昔物語集』巻第二十八第二十四話の梗概は以下のとおりである。

文徳天皇の時代、穀断ちをしているという聖人がいた。天皇もこれに帰依するほどに尊ばれていた。ある時、若い殿上人たちが聖人がいない隙に厠を調べて、米の糞があることを発見する。さらに座敷の下に白米が置いてあるのを見つけた。聖人が戻ってくると殿上人たちは微笑み、「米糞の聖」と散々に囃して笑った。聖人はこれを恥じてどこかへ逃げていった。

30

穀断ちの聖人の「謀リ」が見られる部分を本文から確認する。

35

今昔、文徳天皇ノ御代ニ、波太岐ノ山ト云フ所ニ聖人有ケリ。穀ヲ断テ年来ヲ經ニケリ。天皇此ノ由ヲ聞食テ、召出シテ、神泉ニ被召居テ、帰依セサセ給フ事無限シ。此ノ聖人永ク穀ヲ断タル者ナレバ、木ノ葉ヲ以テ食トシテナム有ケル。

而間、若ク勇タル殿上人ノ物咲スル、数、「去來行テ彼ノ穀断ノ聖人見ム」ト云テ彼ノ聖人ノ居タル所ニ行ヌ。聖人ノ極ク貴氣ニテ居タルヲ見テ、殿上人共礼拝シテ問テ云、「聖人、穀ヲ断テ何年セニ成セ給ヒヌ。亦、年ハ何ニカ成給フ」ト。聖

40

人ノ云ク、「年既ニ七十二罷成ルニ、若ヨリ穀ヲ断タレバ、五十余年ニハ罷リ成ヌ」ト云フ・・・(中略)・・・人ノ謀テ被貴ムトテ思テ密ニ米ヲ隠シテ持リケルヲ不知シテ、穀断ト知テ、天皇モ帰依セサセ給ヒ人モ貴ビケル也ケリ、・・・

(新全集 二一八〜二一九頁)

45

穀断聖人であると偽って、人々に帰依されようと謀っている場面である。穀断ち¹⁰とは仏道修行のひとつで、長期間穀類を摂取しないことである。この苦行を実践した行者は「仙人」や「聖人」と呼ばれて尊ばれた。点線部では、天皇がこの聖人に帰依していることが確認でき、聖人が天皇を騙すことに成功していることが確認できる。また、傍線部②では、

50

聖人の元を尋ねてきた「若ク勇タル殿上人」達に対しても五十年以上穀断ちをして偽り、騙そうとしている。実際には、傍線部③のように、米を隠し持って食べていたのであるが、皆が偽聖人に騙されていた。

ここで問題となるのもやはり、身分が上の天皇や殿上人等を謀っている点である。第十八話では謀りは未遂に終わっているが、ここでは既に天皇を始め多くの人を騙している。また、このように人を惑わす法師は当時多かったが、法師としての理想から外れているという点も、第十八話と共通する。

また、「若ク勇タル殿上人ノ物咲スル、数」の行動に注目して本文を確認する。

而間、若ク勇タル殿上人ノ物咲スル、数、「去來行テ彼ノ穀断ノ聖人見ム」ト云テ彼ノ聖人ノ居タル所ニ行ヌ。聖人ノ云ク、「年既ニ七十二罷成タルニ、若ヨリ穀ヲ断タレバ、五十余年ニハ罷リ成ヌ」ト云フ、聞テ、一人ノ殿上人忍テ云ク、「穀断ノシタル屎ハ何様ニカ有ラム。例ノ人ノニハ不似ジカシ。去來行テ見ム」ト云合セテニ三人許厠ニ行テ見レバ、米ヲ多ク口量タリ。此レヲ見テ、「穀断ハ争デ此クハ可為キゾ」ト怪ビ疑ヒテ、聖人ノ居所ニ返リ行タレバ、聖人白地ニ立去タル間ニ、居タル畳ヲ引返シテ見レバ板敷ニ穴有リ。下ニ土ヲ少シ掘タリ。「怪シ」ト思テ吉ク見レバ、布ノ袋ニ白キ米ヲ裏テ置タリ。殿上人共此ヲ見テ、「然レバヨ」ト思テ畳ヲ本ノ如ク敷テ居ルニ：

(新全集 二一八〜二一九頁)

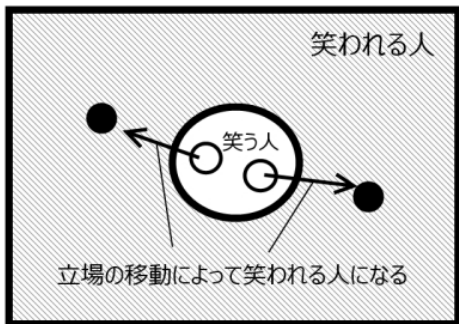
傍線部①では、一人の殿上人が「穀断ちをしている人の糞はどのようなものだろうか。普通の人の糞とは違うのだろう。厠に行つて見てみよう」と謀っている。これは第二章で考察した「若キ」人々による謀り同様に悪ふざけであるが、この「謀り」の成功は穀断ち聖の失態に繋がる。

傍線部②は、厠を覗き、糞に米が混じっているのを見たのを怪しんだ殿上人たちは、聖人の家宅搜索をし、聖人の居ぬ間に板敷の下に米が隠されているのを発見する。そこで、穀断ち聖人が殿上人達や天皇を謀るインチキ法師であると気づくのである。そして、何事もなかったかのように畳を元通り敷き直すことで、聖人は自分の企みがばれていることに気づかず、部屋に戻ってくるのである。ここでも、謀る者(Ⅱ穀断聖人)と、謀られる者(Ⅱ若い殿上人達)の立場が逆転していることが確認できた。

第十八話、第二十四話とも、謀りの内容は僧や法師として理想的でないことが確認できた。また、謀られる者と謀る者の立場が話中で逆転している。一方の「謀り」の失敗は、もう一方の「謀り」によって引き起こされる。一方の「謀り」の失敗は、一方の「謀り」の成功とも言える。この立場の逆転により、謀っていた者(Ⅱ笑うはずだった者)が一転して笑われる者に変化している。これを図に示すと次のようになる。

【図七】「謀り」の露見による「謀る者」と「謀られる者」の立場の移動

初めは謀る者(Ⅱ笑う者)であったものが、「謀り」の露見によって笑われる人になつていく。笑う者と笑われる者の関係が逆転しているということを示したのが、【図七】である。



第二節 謀りによって生じる笑い―「類咲ム」

『今昔物語集』巻第二十八第十八話、第二十四話は、「謀り」の成功と失敗が両方見られる話であった。「謀られる者」と「謀る者」の逆転によって生じた笑いは、二例とも「類咲ム」が用いられている。「類咲ム」とはどのような笑いで、なぜ彼らは「類咲ム」んだのだろうか。第一項では、笑いの攻撃性について触れながら、「類咲ム」がどのような笑いだったのかを考察する。第二項では、本文中での「類咲ム」場面を確認し、これがどのような意味であるのかを考える。

第一項 笑いの攻撃性と「ほほむむ」

「ほほむむ」という笑いを考える前に、まずは笑いの持つ意味、特に攻撃性について確認する。

三浦佑之氏¹²は、『古事記』『日本書紀』などの古代の文献に見られる「咲¹³」「嗤咲」「嘲笑」「晒」など「ワラフ」と訓読できる用例を分析した¹⁴。三浦氏は、例外なく古代の「ワラフ」は「相手を拒絶し、笑う者と笑われる者との関係を遮断する行為」であると指摘している。また、笑いの対象となるのは、共同体の倫理観や秩序に違反する行為であるとし、笑われることは恥ずべきことであり、笑いが世間との疎外関係を生じさせる行為であると述べている。一方で、「エム」「エラク」は親和の意味で使われる語であると述べ、古代においては笑いが三種類あったと述べている。

【資料四】古代における笑い（三浦氏論文を参考にして作成）

音の有無	無し	エム	ワラフ	エラク
意味	相手への親和	有り	有り	有り
反応	相手を充足させる	自分が満たされる	相手への攻撃	相手への親和
				自分が充足する

現在はこれらの語は混同され、「笑う」という一語に纏められているが、古代から笑いには攻撃の意味があった。

また、笑いの攻撃性は、絵画資料にも表れている。『今昔物語集』と同じく、一二世紀に成立したと見られている『病草紙』¹⁵は、様々な病気や奇形を描いた絵巻であるが、病気を記述しながらもこれに対する治療法を示すわけではなく、病人の苦しみに対してもほとんど同情を示さずに、滑稽化しているという¹⁶。

【資料五】『病草紙』背骨の曲がった男。



【資料六】肥満の女



上…背骨の曲がっている男を笑っている。
下…肥満で自分では歩けない女を、男二人が隠れて笑っている。

【資料七】二形の男



【資料八】毛虱をうつされた男



上…両性具有の男が眠っている間に、男たちが
着物をめくって笑っている。
下…毛虱をうつされて痒がっている夫を、うつ
した張本人の妻が笑っている。

これらの病氣や奇形を笑っている人々は、病氣や奇形ではない人々である。笑っている側は常に、自分が優位に立っており、笑われる側に対して侮蔑、嘲笑している。つまり、笑うことは、笑う者と笑われる者とが優位な者と不利な者という対立的関係におかれるということでもあった。¹⁷⁾このことを踏まえ、「ほほゑむ」について考察する。

「ほほゑむ」は平安時代に入ってから使用例が見られる語である。曾田文雄氏は「ほほゑむ」の意味として、以下の二点に大別している。¹⁸⁾

一 対象となる相手に対し、共感と同情とだけからでた好意的感情が動作となつて表れた場合。

二 対象となる相手に対し、幾分距離を設けての、批判めいた立場に立つ感情が動作となつて表れた場合。

そして平安時代における文学作品の使われ方として『源氏物語』を中心に考察し、「二」の使われ方が主流であることを述べている。これは、「憎悪の如き敵意を抱いてまでには絶対つながらないもの」：少々相手を突き放しての、いわば、ニヤリとする、といった、一種の皮肉めいた感情に根ざしている「笑いである」としている。

また、松尾聰氏は、「ほほゑむ」という語について、中世前半期までの作品群の用例を通して「にこにこ」の意か「にやにや」の意かを検討し、中世においては「ほほゑむ」という語

はすべて「にやにやする」と解くべきであると述べている。¹⁹⁾

即ち、笑うそのものが持つ攻撃性は、「ほほゑむ」ことにも現れる。また、重要なのは、「ほほゑむ」者は相手を批判する立場に立ちながら、相手に対して「憎悪の如き敵意」までは抱いていないという点である。二膺の老僧や穀断ち聖人の「謀り」は、殺害計画や天皇までもを騙すという、容認できないものであるにも関わらず、それに対して憎悪の念までは抱かない。「ほほゑむ」者はそういう意味で、相手より優位にたつ余裕が感じられ、「ほほゑむ」には余裕の意味もあると考えられる。

第二項 「頬咲ム」―二重の意味の笑い

ここで、『今昔物語集』巻第二十八第十八話、第二十四話の「頬咲ム」場面を確認し、それぞれが「頬咲」んだ意味を考察していく。

第十八話での「頬咲ム」場面は以下の通りである。

【1】第十八話「金峰山別当食毒茸不酔語」
既ニ食畢テ、湯ナド飲ツレバ、房主、「今ハシ得ツ」ト思テ、「今ヤ物突迷ヒ、頭ヲ痛ガリ狂フ」ト、心モト無ク見居タルニ、惣テ其ノ気色モ無ケレバ、「極ク怪シ」ト思フ程ニ、別当齒モ無キ口ヲ少シ頬咲テ云ク、「年来、此ノ老法師ハ、未ダ此ク微妙ク被調美タル和太利ヲユソ不食候ナリヌレ」ト打云テ居タレバ、房主、「然ハ知タリケル也ケリ」ト思フニ、奇異ト云ヘバ愚也ヤ。

(新全集 二〇五頁)

無事別当に和太利を食べさせ、二臈の老僧の計画は成功したかのように思われた。傍線部①では、別当が何事もなかったようにしているのを見て、二臈の老僧は不審に思っている。その様子を見た別当は、その場で少し微笑む。傍線部②で、「私は、このように美しく調理されている和太利は食べたことはありません」という。平茸と偽って和太利を食べさせるという二臈の老僧の「謀リ」は全て別当に気付かれていた。別当は「すべてわかっているんだぞ」と言わんばかりに微笑むことで、軽い非難をほのめかしている。これは、別当のほうに二臈の別当よりも上手であり、優位にあるという余裕の笑みとも考えられる。またこの笑みは、別当が「謀る者」となっていることよって、「謀リ」の成功を喜ぶ満足の笑みでもあると考えられる。つまり、老僧の「謀リ」の失敗を笑いながら、自らの「謀リ」の成功に満足するという二重の意味があるのである。

また、第二十四話の「頬咲ム」場面は以下の通りである。

【2】第二十四話「穀断聖人持米被咲語」

聖人返ヌ。其ノ時ニ殿上人共頬咲テ「米屎ノ聖々」ト呼嚙テ咲ケレバ、

(新全集 二二八〜二二九頁)

聖人が少し席を離れた時、家宅搜索を執行した殿上人たちは、聖人が白米を隠し持っていたことを知る。そして、聖人が戻ってきた時、殿上人たちはその場で微笑み、「お前の正体はすべてわかっているんだぞ」と余裕を見せている。またこの笑みは、第十八話同様、イカサマ聖人の「謀リ」を暴くことに成功した満足の笑みと、「謀リ」の失敗を嘲笑する二重の意味がある。さらに、第十八話には見られない笑いとして、「米屎ノ聖々」と大声で呼んで笑っていることが挙げられる。これは「頬咲ム」より相手に対する攻撃の意味が強く、相手に恥をかかせることにつながる。

第三節 笑われる人の反応―恥とその場からの逃走

「謀られる者」となり笑われた二臈の老僧や穀断ちの聖人は、その場から逃走している。笑われることが恥と考えられていたことは、三浦氏の指摘にもある通りであるが²¹、『今昔物語集』巻第二十八においても失態を演じて笑われることは恥と考えられており、笑われてその場から逃げ去る話が多い。

【資料九】『今昔物語集』巻第二十八における笑われて逃走する話一覧

一段目には話数を示した。二段目には「謀リ」が本文中に明記されているものに「○」、明記されていないが途中で失敗するものに「△」、「謀リ」という語が用いられていないが、内容から人を騙す、仕組むことが認められるものに「(○)」を示し、ないものには「×」を示した。また、本文は笑われ、その場から逃走する場面を示し、解釈を示した。

5

10

15

20

25

30

35

40

45

話	謀り	本文	解釈
1	○	其ノ後、此ノ事世ニ聞エテ、若キ君達ナドニ吉ク被 _レ 咲ケレバ、君達ノ見ユル所ニハ、重方逃 _レ ケ隠 _レ ナムシケル。	元々女好きだった性格が祟り、妻の謀りに引っかけかり、嗚呼を晒す。笑われることに恥を感じている。
2	△ 失敗	其ノ後、皆□ヲ履テ、烏帽子ヲ鼻ノ許ニ引入テ、扇ヲ以テ顔ヲ塞テゾ、撰津ノ守ノ一条ノ家ニハ返タリケル。	武士が、慣れない牛車に乗りひどい酔い方をする。自分の醜態を見られることを恥じ、顔を隠して返っている。
10	×	其ノ咲フ交レニ、武員ハ立走テ、逃テ去ニケリ。其ノ後、武員久ク不参ザリケリ。	僧正の前で誤って放屁してしまう。その後しばらく僧正の許へ参らなかつた。
18	○	別当齒モ無キロヲ少シ類咲テ：恥クテ、更ニ物モ否不云ズシテ、房主人ヌレバ：	自分の謀りが暴かれ、失態となる。笑われ、恥を感じてその場から逃走する。
24	○	其ノ時ニ殿上人共類咲テ、「米屎聖々」ト呼嚕テ咲ケレバ、聖人恥テ逃テ去ケリ。	自分の謀りが暴かれ、失態となる。笑われ、恥を感じてその場から逃走する。
26	×	上達部達此レヲ見テ、咲ヒ嚕リ給フ事無限シ。其ノ時ニ、清忠迷テ土ニ落タル冠ヲ取テ指入レテ、箱文モ不給ハラズシテ、逃テ去ニケリ。	冠を落とされるという失態。恥を感じてその場から急いで逃げている。
27	○	館ノ者共此レヲ見テ、興シ咲テ嚕ケル程ニ、目代恥テ印ヲ投棄テ、立走テ逃ヌレバ：	傀儡子であった目代は、自分が傀儡子であったことを隠していたが、仲間の演奏に乗せられてしまう。仲間の謀りで笑われ、恥を感じてその場から走って逃げている。
30	○	其ノ比ノ物語ニ、此ノ事ナム語テ人咲ケル。茂経其ノ後恥テ、左京ノ大夫ノ許ヘ否不行ズ成ニケリ。	若者達の謀りに引っかけかり、上司である左京大夫の前で失態を演じ、笑われる。恥を感じ、左京大夫の元には行けなくなってしまう。

『今昔物語集』巻第二十八に笑われて逃走する話²²は8例あり、その多くは恥の意識を伴っている。また、それらのうち「謀り」が関係するものが6例見られた。「謀り」によって引き起こされた失態であっても、笑われることは恥であった。

ここで、第十八話、第二十四話のそれぞれの笑われる者の反応を確認する。
 【1】第十八話「金峰山別当食毒茸不酔語」
 恥クテ、更ニ物モ否不云ズシテ、房主人ヌレバ、別当モ房ヘ返リニケリ。早夕、此ノ別当八年来和太利ヲ役卜食ケレドモ不酔ザリケル僧ニテ有ケルヲ不知デ、構タリケル事ノ支度違テ止ニケリ。

(新全集 二〇五頁)
 別当の余裕を見せつけられ、非難をほめかされて「類咲」まれた老僧の反応である。

この余裕の「頬咲ミ」を受け、老僧は自分の「謀り」の失敗を自覚させられることになり、恥を感じさせられるような状況となっている。点線部では恥を感じ、何も言えずにその場から逃走し、房の奥に引込む。また、傍線部②では謀ろうとしたことの当てが外れてしまった、とあるように、二鷹の老僧は元々は「謀る者」であった。「謀られる者」となり笑われることは、予想外の出来事である上、毒茸を食べさせ別当を毒殺しようとしたことは、言い逃れできることではない。老僧が単なる被害者の「謀られる者」ではないという点に加え、別当が怒りを表さず、余裕で頬笑んだことが、自らの立場の劣勢さを自覚させられることになり、より老僧の恥の意識を強めていると考えられる。

【2】第二十四話「穀断聖人持米被咲語」

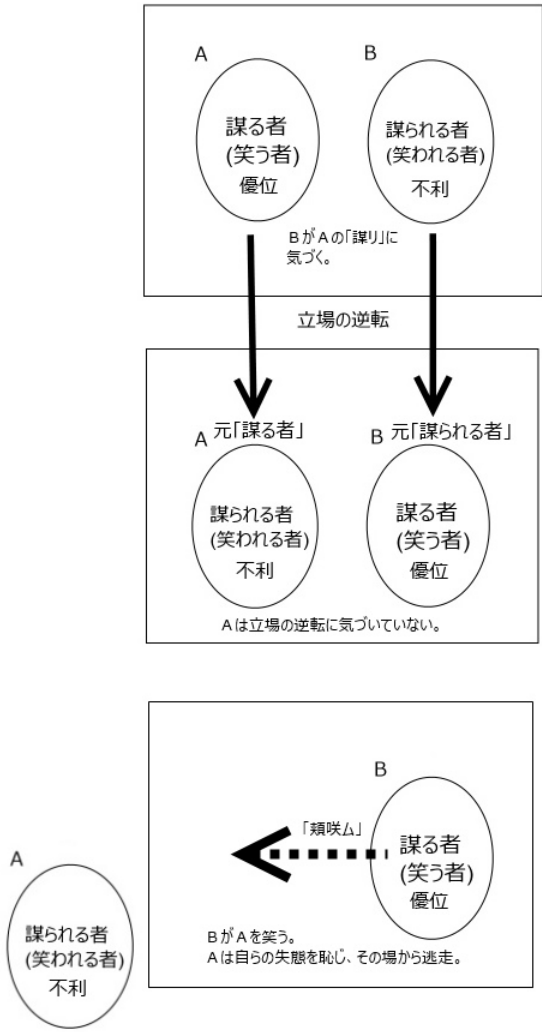
聖人恥テ逃テ去ケリ。其ノ後、行キ方ヲ人不知ズシテ止ニケリ。

(新全集 二一八〜二一九頁)

殿上人たちに散々に笑われ、「米糞の聖」と囃された聖人は、恥ながらその場から逃げ去り、その後行方がわからなくなったという。「米糞」を見られてしまったことは、インチキ聖人である決定的証拠であり言い逃れはできない。また、これまで成功してきた自分の「謀り」が、留守中に家を暴かれることによって露見してしまったのは、この聖人の不注意である。尊ばれることはあっても、自分が笑われることは予想外で、突然の出来事である。ここでは、多数の笑う者に対し、一人の笑われる者という構図になっており、優位にたつ者と不利な者という立場が明確に現れている。

「謀る者」と「謀られる者」の立場が逆転したことにより、笑う者と笑われる者、即ち有利な者と不利な者との立場が逆転したことにより、笑う者であったことが笑われることによって、恥を感じずには居られない状況となっている。また、「謀り」の証拠が掴まれていることで、言い逃れできない状態にあり、不利な立場となって笑われる二鷹の老僧と穀断ちの聖人は、恥を感じてその場から逃げているのである。この笑い笑われる関係をまとめると、次のようになる。

【資料十】「謀る者」と「謀られる者」の逆転による笑いの構図



小結

本章では、謀りの失敗がもたらす笑いを、第十八話、第二十四話の二例を中心に考察した。

第一節では、それぞれの話の「謀り」の内容と謀る者の行動を考察した。「謀り」の内容は、僧として理想的でない点、下位の者が上位の者を謀る点が共通し、第十八話は殺害を謀る点、第二十四話は天皇を騙すという点の全てにおいて、『今昔物語集』内では容認されないものであると結論づけた。また、話中で「謀る者」と「謀られる者」の立場が逆転し、笑う者と笑われる者の関係も逆転することを明らかにした。

第二節では、謀りによって生じる笑いとして両話に共通する「頬咲ム」という笑いに注目し、笑いの意味を考察した。そもそも、笑うという行為には攻撃の意味が含まれていたことから、「頬咲ム」は、相手に対し、非難をほのめかす意がある笑いであるとし、「謀り」に対して怒りや憎悪を抱かないという点で、相手より優位に立つ余裕を感じさせる笑いであると考察した。また、話中で「謀る者」と「謀られる者」の立場が逆転することで、相手の「謀り」を非難しながら、自分の「謀り」の成功を余裕をもって笑うという二重の意味があると結論づけた。

第三節では、両話に共通する笑われる者の行動として、恥を感じて逃走するということを考察した。『今昔物語集』巻第二十八にはこの系統の話が多く存在した。失態を演じ、笑われることは恥と考えられていたが、ここでは笑われる者が元々「謀る者」であったことが、自分の知恵のなさを認めさせ、より恥を感じさせる要因になっていると考察した。

以上から、第十八話、第二十四話は、「謀り」の失敗譚でありながら、成功譚でもあり、「謀る者」と「謀られる者」の立場が逆転して発生する笑いは複雑な意味を持つことがわかった。「謀り」の内容が容認されないものであるのにも関わらず、登場人物は笑っている。「謀られる者」が「謀る者」に自ら変化することで、余裕が生まれ、「頬咲ム」という笑いが用いられていると考えられる。単なる被害者として怒るのではなく、「謀る者」になって相手を笑うという笑いの構図は、「謀り」をどこまでも積極的に評価しようとしている人こそ成し遂げられることであると考える。

25

20

15

10

5

*1 仏・法・僧。

*2 「煎物」は、肉類や野菜類などを水分が少なくなるまで煎った料理。いりやき。また、油で炒めたもの。ここでは茸を炒め物にしたということ。『日本国語大辞典』を引用した。
*3 「臍」は仏語。僧侶が受戒の後、一夏九〇日の安居を行い終えること。この安居を区切りとして僧の出家後の年数を数え、その多少によって位次が定まる。『日本国語大辞典』より引用した。

*4 ツキヨタケの古名。毒性が強く、食べると三十分〜三時間で腹痛、嘔吐、下痢などの中毒症状を起こし、脱水で死亡することもある。さらに、シイタケ・ヒラタケなどの食用茸とまぎらわしく、よく誤食され、日本の毒茸中毒のうちではこれによるものが最も多い。茎基部の肉を裂いて暗紫色の斑点を確かめれば簡単に区別できる。『日本国語大辞典』を参照した。

*5 平茸は、マツタケ科のきのこ。かさが偏平であることからの名。晩秋から春にかけて、広葉樹の朽木の幹などに群生し、美味。(新編日本古典文学全集(4)二〇〇頁注五より引用。)

*6 「例の」は「普通の」の意。別当には毒茸の和太利を、自分は普通の平茸を食べたということ。

*7 新全集注二五に従い、「とくに」と解釈する。別当は和太利を特に好んで食べていたが、茸の毒にあたることはなかったということ。

*8 大谷伊都子氏は、『今昔物語集』巻二十八の笑話について『梅花短大国語国文』八、一九九五年一〇月)内で「謀る者」と「謀られる者」の立場が固定している場合もあれば、謀られた者が「謀る者」に、謀った者が「謀られる者」というように話の中で立場

- が逆転する場合もある」と指摘している。
- *9 八二七年に生まれ、八五〇年に没。在位は嘉祥三（八五〇）年〜天安二（八五〇）年。仁明天王の第一皇子で、母は藤原冬嗣女順子。『国史大辞典』を参考にした。
- *10 穀断ちは、仏道修行や願を立てるため、穀物を食わずに木の実、草の根などで生活すること。『宇治拾遺物語』一四五話は同話で、同じく穀断ちの聖が登場する。また、『宇治拾遺物語』二四話では、「いみじき穀断ちの聖なりとも、かかる事する人やはあるべき」と記述される。これは、隣人の主人が亡くなったものの、門の方角が悪かったため、垣根を割って自分の家から死人を出せばよいという発言に対するもので、たとえ五穀を断って修行しているような人でさえ、そのようなことはしないと言われている。穀断ちは高德の僧の証でもあった。
- *11 人を騙し惑わす法師としては、『宇治拾遺物語』第六話「中納言諸時、法師の玉莖検知の事」の狂惑法師がいる。新全集注一五では、田口和夫「中世的人間像―宇治拾遺物語『狂惑の法師』の解釈から―」によれば「ウソを職業としている法師」のことで、『雑談集』第九巻に見える「誑惑ノ事」を引く。「日本ノ乞食法師ハ、誑惑ヲモテ道トシテ渡世シ侍ル。シヲホセテハ得分也。シソコナヘバ、我ハ乞食也トナノリヌレバ、常ノ人ニモ不似過ナシ。ヲヒイダサレ侍ル。昔ヨリカ、ル習ヒ也」。狂惑法師の謀りも、中納言の謀りによって失敗に終わってしまうのであるが、「中納言を始めて、そこから集ひたる者ども諸声笑ふ。聖も手を打ちて臥し転び笑ひけり」とあるように、ここでは謀られた者も謀った者も一緒になって笑っている。
- *12 三浦佑之「古代文学にみる笑い―「ゑむ」と「わらふ」をめぐる―」（『日本の美学』二〇、一九九三年十一月）による。
- *13 「咲」は「笑」の古字。『今昔物語集』卷第二十八の笑いも「咲」という文字で表されている。（廣漢和辞典を参照。）
- *14 例えば、『古事記』下・允恭には「我が天皇の御子、いろ兄の王に、兵をな及りたまひそ。若し兵を及りたまはば、必ず人咲はむ。僕捕へて貢進らむ。」とある。
- *15 『病草紙』は十二世紀頃に成立したと見られ、絵、詞書ともに作者未詳。様々な病気や奇形を描いている。
- *16 『新修日本絵巻物全集(7)地獄草紙・餓鬼草紙・病草紙』（角川書店、一九七六年）内の解説に
 *17 注12に同じ。
 *18 曾田文雄「「ほほゑむ」小考」（『文教国文学』二〇、一九八七年十月）による。
- *19 松尾聰「中世前半期までの「ほほゑむ」の用例の語意吟味―終章―」（『国語展望』六一、一九八二年六月）、「ゑむ」の語義吟味」（『国語展望』五四、一九八〇年三月）、「続「ほほゑむ」考」（『国語展望』五三、一九七九年十一月）を参考にした。また、「ここにこそする」は「ゑむ」の語が担っているとしており、これは三浦佑之氏が「ゑむ」を相手への親和の意で用いられる語として一致している。
- *20 『今昔物語集』卷二十四第五話「小野篁依情助西三条大臣語」などに、余裕の「類咲ミ」が見られる。相手よりも優位に立っている笑いであるが、非難の意はない。
- *21 注12に同じ。笑いの対象となるのは、共同体の倫理観や秩序に違反する行為であるとすし、笑われることは恥ずべきことであり、笑いが世間との疎外関係を生じさせる行為とする。
- *22 徹密に言えば第二話の侍達は笑われてはいないが、醜態を見られれば笑われ、恥をかくということ想定しているため、姿を見られないように隠れながら帰っていると考えられる。

結章

本論文は、『今昔物語集』巻第二十八における笑いについて、特に「謀り」によって生じる笑いの構図を、大谷伊都子氏の「謀る者」「謀られる者」という考えを元に、それぞれの人物の行動や反応、笑い方などを考察してきた。

まず第一章第一節では、『今昔物語集』巻第二十八の笑いを考察する上で重要な要素となる、「嗚呼」「物云」について、それぞれの使用箇所を整理し、辞書的意味を確認した。両者は笑われる者であるが、「嗚呼」は失態を起こし非難される可能性を伴う存在であり、「物云」は巧みな機知で賞賛されることがある存在であると考察した。

第二節では、『今昔物語集』巻第二十八の笑いを、特に失態の話について分類した。失態には、①自業自得の失態と、②「謀り」によって引き起こされる失態の二種類があった。自業自得の失態では、「憎ミ咲フ」という語が用いられる話を例に、笑われる者は自分の失態に無自覚で、それを非難、嘲笑されながら笑われていた。この笑いは失態を演じた者のいない場所で起こるため、笑われる者は笑われていることに気づいていなかった。また、相手との関係や個人差によって、「憎む」と「笑う」の境界線が変わることも明らかにした。また、『今昔物語集』巻第二十八の中では、「謀り」の規模は様々であり、第二十五話のように悪ふざけの域を出ないものもあれば、第一話のように懲らしめの要素が強いものもあり、また、第五話や第十八話などのように、人を苦しめたり、殺害を計画するなど悪ふざけを超えた悪質なものがあつた。悪質な「謀り」によって引き起こされる失態への笑いは、現代では笑えない話が多いことを第五話、第十八話を例に示した。

また、第二章では、「謀り」の成功によって生じる笑いについて考察した。

第一節では、謀る者だけが笑う例として、①若者たちによる謀り、②物云による謀りに分類し、「謀る者」と「謀られる者」のそれぞれの行動や反応、笑い方を考察した。①の若者達の「謀り」は複数人で行われ、悪ふざけの感が強かったのに対し、「物云」による「謀り」は単独で行われ、悪ふざけではあるものの、「謀り」の成功に伴って「物云」の巧みな仕掛けが披露されていた。「謀られる者」は、自分が騙された、嵌められたと自覚した時、①では怒り、嘆き、恨みなどの感情を伴った。一方②は、怒りや悔しさを抱くものの、「物云」の「謀り」に嵌まった自分の非を認め、相手に対して真剣に怒るという反応は見られなかった。また、「謀る者」の笑い方は、①の若者達はその場で笑うのに対し、②の「物云」は心中では笑っているものの、その場では笑わないのではないかと考察した。

「謀り」による殆どの話は「謀られた者」は笑わないが、第二節では、謀った者も謀られた者も笑っている唯一の話として、第五話「越前守為盛付六衛府官人語」を考察した。この「謀り」の内容は、人に下剤を飲ませるといふ悪ふざけを超えた悪質なものであるが、「謀られる者」はひどい目に遭いながらも、「謀る者」を憎いと思うことはなく、寧ろ「謀り」を予想しつつも騙されてしまった自分たちの自業自得であるとしていた。「謀る者」は「極タル細工ノ風流有物」と呼ばれた「物云」であり、「謀り」を成功させる手腕の見事さに感心することで、「謀られる者」までもが笑ってしまうと考察した。また、笑いの構図は第一節のものと対照的に、「謀る者」が単独、「謀られる者」が多数となっていることも、「謀られる者」が笑えた要因の一つなのではないかと結論づけた。

第三章では、謀りの失敗がもたらす笑いを、第十八話、第二十四話を中心に考察した。この二話は、話中で「謀る者」と「謀られる者」の立場が逆転すること、一方の「謀り」の失敗譚でありながら、もう一方の「謀り」の成功譚でもあるという複雑な構図を持っている話であった。

第一節では、それぞれの話の「謀り」の内容と、「謀る者」の行動を確認した。「謀り」の内容は、①僧として理想的でない点、②下位の者が上位の者を謀る点が共通し、『今昔物語集』内では容認されないものであることを考察した。

第二節では、両話に共通する「類咲ム」という笑いを取り上げ、その意味を考察した。「ほほむむ」は、相手より優位に立つ余裕を感じさせる笑いであった。また、話中で「謀る者」と「謀られる者」の立場が逆転することで、相手の「謀り」を非難する立場に立ち

ながらも、自分の「謀り」の成功を余裕をもって笑うという二重の意味があると結論づけた。

第三節では、笑われる者の行動として、恥を感じて逃走する場面を両話から確認した。『今昔物語集』巻第二十八にはこの系統の話が多く存在し、失態を演じ、笑われることは恥と考えられていたことを確認した。また、笑われる者が単なる被害者ではなく、元々「謀る者」であったことが、自分の非を認めさせ、より恥を感じさせる要因になっていると考察した。

以上、「謀り」がもたらす笑いの構図について考察を行った。「謀る者」は笑う者、「謀られる者」は笑われる者となり、その関係は様々な様相を呈した。「謀る者」だけが笑える話では、「謀られる者」は被害者的であり、怒りや憎しみを抱く。しかし、「謀る者」の「謀り」の技術によっては、その「謀り」の巧みさから、「謀られる者」に騙された自分の非を認めさせ、怒りや憎しみの感情を緩和させることもあった。これは「物云」という賞賛を伴う笑いをもたらす人々による「謀り」の場合にのみ認められた。騙し騙されることは、騙される側にとっては単に愉快なこととは言えないが、当時の人々は騙されることをどこか自分の責任と考え、それを事前に回避することが求められていた。そして、単なる受け身の被害者としてではなく、自分が「謀る者」に転じて相手を笑うように、「謀り」をどこまでも積極的に評価する姿勢が第十八話、第二十四話では見られた。『今昔物語集』巻第二十八の「謀り」は現代では笑えない話が多いが、これらを笑い、認めようとするのが『今昔物語集』巻第二十八の笑いの一側面であったと結論づけた。

〈参考文献〉

《今昔物語集全般》

- ・三木紀人『今昔物語集宇治拾遺物語必携』（學燈社、一九八八年）
- ・小峯和明『説話の声―中世世界の語り・うた・笑い』（新曜社、二〇〇〇年）
- ・小峯和明『今昔物語集を学ぶ人のために』（世界思想社、二〇〇三年）
- ・小峯和明『今昔物語集の形成と構造』（笠間書院、一九八五年）
- ・前田雅之『今昔物語集の世界構想』（笠間書院、一九九九年）
- ・森正人『今昔物語集の生成』（和泉書院、一九八六年）
- ・中野幸次『今昔物語集』（岩波書店、一九八三年）

《笑い》

- ・柳田国男『不幸なる芸術・笑いの本願』（岩波文庫、一九七九年）
- ・山口昌男『笑いと逸脱』（筑摩書房、一九八四年）
- ・ベルクソン『笑い』（岩波書店、一九七六年）
- ・佐藤泰正編『文学における笑い』（筑摩書院、一九七七年）

〈参考論文〉

《笑い》

- ・小峯和明「中世笑話の位相『今昔物語集』前後」（『日本の美学』二〇、一九九三年一月）
- ・安村敏信「笑う妖怪女たち―笑い」と性と覗きと」（『日本の美学』二〇、一九九三年一月）
- ・小島孝之「『宇治拾遺物語』―「笑い」の語り方」（『中世文学の回廊』、二〇〇八年）
- ・福永義臣「『宇治拾遺物語』の〈笑い〉の表記の問題についての一考察」（『国語国文学研究』一〇、一九七四年）
- ・渡辺麻里子「『今昔物語集』巻二十八第一話「近衛舍人共稻荷詣重方値女語」試論―巻二十八の主題と巻頭話としての意味―」（『朱』五十四、二〇一一年三月）
- ・航城梓「『今昔物語集』本朝世俗部の仏教的背景―巻二十八をめぐる―」（『日本語と日本文学』三九、二〇〇四年八月）
- ・樹下文隆「『今昔物語集』巻二十八における笑いの意味―誰が笑い、誰が笑われ、何が可笑しいのか―」（『説話論集』一二、清文堂出版、二〇〇三年）
- ・津田和義「『今昔物語集』巻第二十八第二十二話の考察」（『駒沢国文』二九、一九九二年二月）
- ・鈴木佳織「『今昔物語集』研究―巻第二十八における「笑い」―」（『東京女子大学日本文学』一〇一、二〇〇五年三月）
- ・土井廣子「嘲笑の行方―『今昔物語集』巻第二八をめぐる―」（『東洋女子短期大学紀要』三二、二〇〇〇年三月）
- ・大谷伊都子「沙石集の笑話について」（『語文（大阪大学）』五三・五四、一九九〇年三月）
- ・藤本徳明「『沙石集』笑話の意味」（『日本文学』一八一七、一九六九年七月）
- ・前田雅之「憎（にく）ミ咲（わら）フ光景―『今昔物語集』信濃守藤原陳忠説話における強欲と笑い」（『新しい作品論』へ、〈新しい教材論〉へ古典編』二、二〇〇三年一月）
- ・大谷伊都子「『今昔物語集』巻二十八の笑話について」（『梅花短大國語国文』八、一九九五年一〇月）
- ・神尾暢子「笑咲行動の表現価値―今昔物語の行動規定」（『学大国文』三六、一九九三年二月）
- ・田村憲治「『今昔物語集』の笑いの背景―巻二十八ノ第三十八話をめぐって」（『芸文東海』一六、一九九〇年一二月）
- ・王淑芳「『今昔物語集』における笑い―巻二十八を中心として―」（『日本語日本文学』

- 一〇、一九八三年一月)
 - ・三浦佑之「古代文学にみる笑い―「ゑむ」と「わらふ」をめぐる―」(『日本の美学』二〇、一九九三年一月)
 - ・阿部泰郎「笑い」における芸能の生成」(『日本の美学』二〇、一九九三年一月)
 - ・倉島節尚「あざわらふ」小考」(『解釈・国語・国文』二二一九、一九七六年九月)
 - ・松尾聰「わらふ・ゑむ・ほほゑむ」(『国語展望』五二、一九七九年九月)
 - ・山田みどり「悪(にく)みわらふもの」(『成蹊国文』二八、一九九五年三月)
 - ・古沢利枝「笑い」に関する語について―「わらふ」と「ゑむ」を中心に」(『一の坂川 姫山国語国文論集』一七、一九九七年五月)
 - ・湯本なぎさ『源氏物語』における「わらふ」「ゑむ」「ほほゑむ」をめぐる」(『共立レビュー』二〇、一九九二年二月)
 - ・曾田文雄「ほほゑむ」小考」(『文教国文学』二〇、一九八七年十月)
 - ・松尾聰「中世前半期までの「ほほゑむ」の用例の語意吟味―終章―」(『国語展望』六一、一九八二年六月)
 - ・松尾聰「ゑむ」の語義吟味」(『国語展望』五四、一九八〇年三月)
 - ・松尾聰「続「ほほゑむ」考」(『国語展望』五三、一九七九年十一月)
 - ・大塚隆夫「言葉の検索―「ほほゑむ」私見」(『国語展望』六二、一九八二年十一月)
- 《きのこ》
- ・上田俊穂・伊沢正名『検索入門 きのこ図鑑』(保育社、一九八五年)
 - ・佐藤克二「北国のきのこ」(トリョーコム、一九八二年)

20

15

10

5

付録 『今昔物語集』巻第二十八の笑いの種類

※本文はすべて『新編日本古典文学全集38・今昔物語集(4)』を参照した。一段目には話数を、二段目・三段目にはそれぞれ誰が誰を笑っているのかを示した。四段目には、これまで笑いとの関係があると言われてきた「嗚呼」「物云」の要素の他に、「謀り」「や」「案」が見られるものを示した。また、本文中で明記されているものに○、できないものに×、明記されていないが内容から「嗚呼」「物云」「謀」と考えられるものは○で示した。五段目はなぜ笑うのかの解釈、六段目にはその他注意すべき点をあげた。

話	誰が	誰を	笑いの要素			本文(笑う箇所)	解釈(なぜ笑うのか)	その他
			嗚呼 (不覚・失態)	物云ヒ	謀り (案)			
1	妻、公達、世間の人	茨田重方	○	妻	○	妻、「穴鎌マ、此ノ白物。目盲ノ様二人ノ気色ヲモ否不見知ズ、声ヲモ否不聞知デ、嗚呼ヲ涼テ人ニ被咲ルハ、極キ白事ニハ非ズヤ」ト云テゾ、妻ニモ被咲ケル。 其ノ後、此ノ事世ニ聞エテ、若キ君達ナドニ吉ク被咲ケレバ、…重方逃ゲ隠レナムシケル。	重方の浮気性を確かめるために妻は美女に変装。それにまんまと引っかけかり妻と知らずに口説き始めるという失態が「白事」「嗚呼」と妻は批判するが、夫が家に帰ってきたことで機嫌は直った。自分が笑い者になると自覚した重方は逃げ隠れた。	重方は「止事無キ舍人」だが、「本ヨリ□々シキ心有ケル者」「行摺ノ打付心」「シヤ心」などと評価は悪い。
2	なし	平貞道、平ノ季、武、□ノ公時	○	×	△ 失敗	なし	郎等は賀茂祭の返さの日、見物したさに慣れない牛車に乗るも、ひどい車酔いをし、結局祭りを見るところではなくなった。失態こそ顔と顔を隠しながら逃げ帰るといふ失態。これは「嗚呼」である。	郎等は「心猛ク思量賢コキ者共」と高い評価をされていたが、ひどい酔い方をしてしまったのは思量が足りないこと。
3	殿上人、若い貴族など	曾禰好忠	(○) 編者からみて好忠	(○) 好忠	(○) 好忠	…殿上人共踏ケレバ、七八度許被踏ニケリ。其ノ時ニ曾タムガ起走テ、身ノ成様モ不知逃テ走ケレバ、殿上人ノ若キ隨身共小舎人童共、曾タムガ走ル後ニ立テ、追次キテ手ヲ叩テ咲フ。 此ヲ見ルニ、多ノ人、老タル若キトモ無ク、咲ヒ合タル事無限シ。 「汝等ハ何事ヲ咲フゾ。我ハ恥モ無キ身ゾ。云ハム、聞ケヨ。太上天子日ニ出サセ給フ、歌謡共ノ召、ト聞テ、好忠ガ参テ座ニ候フ、搔栗ヲホト、食フ。次ニ被追立ル。次ニ被蹴ル。何ノ恥ナル」ト云フヲ聞テ、上中下ノ人々咲フ音、糸愕タ、シ。 其比ハ人皆此ノ事ヲ語テナム咲ヒケル。	円融院が子の日の宴を開いた時、好忠は呼ばれてもいないが「心ノ不覚」で歌会に勝手に出向き当然のように振る舞う。追い立てられ蹴飛ばされても恥を恥とも思わない身であると自称し、逆になぜ笑われるのかと聞き直っている。まず逃げる好忠を「見て」笑い、次に好忠の言葉「聞いて」笑うという視覚的、聴覚的な二種類の笑いが見られる。好忠はその後どこかへ逃げ去っていく。	好忠は和歌は上手かつたが「心ノ不覚」で「恥」を見て、人に笑われる目にあつたのだと評価。物の道理を弁えない行動に対して編者は厳しい。一方好忠の、「我ハ恥モ無キ身ゾ」という言葉から、好忠がわざとヲコを演じていることが推測できる。
4	殿上人、皇族、聞いた人	尾張守、その一族	○	×	○	然レバ、簾ノ内ノ様悪キ事無限シ。若キ殿上人蔵人ナド、此レヲ見テ咲ヒ興ジケリ。 此ク恐ス事ヲ知タル若キ殿上人四人コソ、簾ノ内ニ有トル者ノ恐チ迷フ気色ヲ可咲トモ見レ、隣ナル五節所ノ人共ノ臨テ、「可	尾張守は身分が低い生まれではなかったが、一族で誰も昇殿を許されることはなかったために宮中の作法に暗かった。そのため、殿上人等から見れば自分たちを恐れ、隠れた馬鹿な者を驚かすための謀	尾張守は「本ヨリ心直クシテ、身ノ弁ヘナドモ有ケレバ」、「本ヨリ物ノ上手」と評価が高かったが、自分を騙した張本人とも知らずに「後安キ心御シケレ

15	14	13	12	11	10		
聞く人	なし	なし	なし	世の人	その場にいた人		
豊後国の講師	八重	仁浄	女房	感秀	秦武員		
×	×	×	×	×	武員		
○	○	○	○	○	○		
(○)	×	(△)	(○)	(○)	×		た ず
「伊佐ノ新発ト名乗ラムト思ヒ寄ケル心ハ、現ニ伊佐ノ新発ニモ増タリケル奴也カシ」ト云テゾ、人	なし	なし	なし	世ニ此ノ事聞エテ、可咲シクシタリ、トゾ讚ケル、トナム語り伝ヘタルトヤ。	武員左右ノ手ヲ披テ面ニ覆テ、「哀レ、死バヤ」ト云ケレバ、其ノ音ニ付テナム御前ニ居タリケル僧共、皆咲ヒ合タリケリ。其ノ咲フ交レニ、武員ハ立走テ、去ニケリ。其ノ後、武員久ク不参ザリケリ。	分で用意する豪語しながら、当日になると「シタリ顔」で用意できなかったと言つて跡をくらし逃げ去つた。このことから「助泥の破子」という言葉ができた。	という言葉の元となつた悪ふざけに対しては「嗚呼」という評価。
豊後国の講師は、任期を延ばして貰おうと京に出向く海路の途中、海賊に出くわす。し	仁浄は物云で、召使の八重という女に対し「廁ニ檜垣差テ。賤ノ物モ不超ズヤ」とひどいからかいをした。しかし八重の咄嗟の物云返して、「尾刺タル狗不入ジトテ」と言つてやり返した。これを殿上人や天皇、仁浄も感心して褒め称えた。	鍛冶師の延正は花山院の勘気を被り水漬けの刑にされたが、院に聞こえるように大声で罵倒し、逆に「痛ク申シタリ。物云ヒニコソ有ケレ」と褒美を貰い、許された。世間はこれを物云の徳だといつた。	浮気していた女房は、誤つて間男の衣を夫に渡してしまふという失態。一方夫は、渡された衣に皮肉をこめた歌をつけて返してやり、そのまま離縁した。世間ではこの夫を褒め称えた。	祇園の別当の感秀という僧は、受領の妻の間男だった。ある日感秀のいる所に受領が帰ってきた。感秀は唐櫃に隠れるも、受領に見破られて櫃に入られたまま誦経料として祇園に送り返される。別当がいけないと開けられないと戸惑う僧達に対し、物云の別当は「只所司開キニセヨ」と言つて開かせ、どこかに逃げだす。	禅林寺の僧正の御檀所で、誤つて大きな屁をしてしまう。皆はそれに触れなかったが、武員の「ああ、死にたい」という言葉で笑つた。武員は不覚を物云の上手さでのりきつたが、逃げた後、恥ずかしがつてしばらく僧正の元に参上しなかつた。	武員は「物可咲ク云フ近衛舍人」であり、物云の武員であつたからこそ「死にたい」などと言えたと評価。不覚を乗り越える物云には評価が高い。	
講師は「物云ヒ可咲キ奴」であり、「伊佐ノ新発ト名乗ラムト思ヒ	仁浄は「極タル教化ノ上手」且つ「物云ヒ」。八重は自分の窮地を物云で乗り越切り、女でも、「物云ヒ可咲キ者」であれば世間の人も面白がり評価した。	延正は「本ヨリ物云ヒ」で、自分の窮地を物云で乗り越える。これを世間では評価している。	女房は「愚カ」、一方殿上人には「心バセ有リ、極カリケル人」と評価される。思量のある立派な人が褒められる。	また、感秀は「本ヨリ極タル物云」であるために、不覚を物云で乗り越え、唐櫃から脱走することに成功。	感秀を痛めつけず、ただ送り返して恥を見せようとした受領に対し、「心賢コキ事也カシ」と高評価。		

25	24	23	22	21	
藤原範囲、源顕定 (○) ×	若ク勇タル殿上人 穀断聖人 米を知られる × △ 失敗	醫師和氣重秀 三条中納言 (○) 異常な食欲に無自覚 ×	大将、世の人 仰ぎ中納言 (○) 常に仰テ空ヲ見ル ×	殿上人、天皇 青経ノ君 ○ × ×	
源顕定ノ朝臣ハ、「極テ可咲」トゾ思ケル。	其ノ時ニ殿上人共類咲テ、「米屎ノ聖々」ト呼嚕テ咲ケレバ、聖人恥テ逃テ去ケリ。 彈正弼源顕定ト云フ人、殿上人ニテ有ケルガ、南殿ノ東ノ妻ニシテ、レバ否不見給ズ、範圍ハ陣ノ御座ノ南ノ上ニテ此レヲ見テ可咲キニ不堪ズシテ咲ヌ。	「水飯ヲ役ト食トモ、此ノ定ニダニ食サバ、更ニ御タリ可止マルベキニ非ズ」ト云テ、逃テ去テ、後二人ニ語テナム咲ケル。	大将頗ル半無ク被思ケレドモ、戯ナレバ否不腹立ズシテ、苦咲テ止ニケリ。 右中弁ハ、其ノ後久ク有テ中納言マデ成テ有ケレドモ、尚其ノ異名不失ズシテ、世ノ人、仰中納言トゾ付テ咲ケル	其ノ人、殿上人ニテ有ケルニ、責テ色ノ青カリケレバ、□ノ殿上人、皆此レヲ、青経ノ君トゾ付ケルヲ咲ヒケル。 若キ殿上人共ノ勇ミ籠タルハ、此ノ青経ノ君ヲ、起居ニ付ケテ不安ズ極ク咲ヒケレバ、 此等ヲ殿上人ヨリ持次キテ、殿上人ノ前ニ参タレバ、殿上人共、此ヲ見テ皆諸音ニ咲嚕ル事愕タ、シ。 兼通ノ中将、我ガ身ヨリ始メテ、隨身モ皆ヒタ青ナル装束ヲシテ、青キ食物ノ限ヲ持セテ参タレバ、「此レヲ咲フ也ケリ」ト御覽ジテ、可咲ク思食ケレバ、否腹立セ不給デ、天皇モ極ク咲ハセ給ケル。其ノ後ハ、□ヤカニ六借ラセ給フ事モ無カリケレバ、殿上人共弥ヨナム咲ヒ嚕ケル。	
朝廷の宣言を下すという重要な場面で、上卿の實資に見えないよう源顕定は下半身を露出する。それを見た範圍は思わず吹き出してしまい、實資に怒られてしまうが事が事だけに説明できなかった。困惑した範圍を見て顕定は面白く思った。	靱断ちの聖人と偽り、尊ばれようと謀ったが、殿上人によって暴かれるという不覚。恥をかいて逃げ去る。	三条中納言は学識や思慮もある素晴らしい人だったが、ひどく太っていた。痩せるために医師に水飯を勧められるも、異常な量の水飯を食べ、結局相撲取のように太ったままであった。医師は逃げ出して人に話して笑った。	いつも空を見ているので「仰ぎ中納言」とあだ名され笑われていた。大将に冗談で「今、大将を犯す星が現れた」と言って暫くした後、大将は本当に死んでしまった。	青経の君は顔が青く、間抜けな姿のため「青経の君」とあだ名をつけられ他の殿上人にひどく笑われていた。天皇はこの事態に機嫌を損ね、このあだ名を禁じた。殿上人の間では、このあだ名を呼んだ者には贖いのため饗応をさせることにしたが、堀川の中将は誤って呼んでしまう。それを利用して堀川の中将は青づくめの饗応をし、一同を笑わせる。天皇すらも、その様子をみて笑い、結局あだ名はそのままになった。	とを忘れ、普通のことのように話して陰で笑われる失態。
公事の際の出来事。「折節不知又由無キ戯レハ、不為マジキ事也」	謀りが失敗して不覚となり、恥を感じて逃げ去る。	本人のいないところで笑いが出てくる。素晴らしい人でも、自分の食べる量を抑えられないのは思量が浅いこと。それに対し恥も感じていない	あだ名を笑う。「由無カラム戲言不可云ズ」と命に關するとは冗談であろうと批判的。	殿上人による殿上人のあいじめ。 あだ名を笑う。	

26	上達部、 当時の人	文屋清忠	(○)	冠を打ち 落とされ	×	×	×	除目ノ時ニ、陣ノ定メニ陣ノ御座 ニ被召テ、清忠時棟並テ箱文ヲ給 ハル間、時棟笏ヲ以テ、手ヲ廻シ テ指スニ、清忠ガ冠ニ当テ打落シ ツ。上達部此レヲ見テ、咲ヒ嗤リ 給フ事無限シ。 其ノ此ノ世ノ咲ヒ物ニハ此ノ事ヲ ナムシケル。	除目(官職任命の儀式)の時、 いつも生意氣そうに踏ん反り 返っている文屋清忠が、間が 抜けていて腰が曲がっている 大江時棟という対照的な人に 冠を誤って落とされてしま い、慌てて逃げ出した。 上達部は笑い騒ぎ、当時の人 はこれを笑い種にした。	「何かニ奇異カリケム」 と、正式な場での失態 に対して批判的。
27	館の人、 国の人	傀備子目	(○)	失態	×	×	×	守奇異ク、「此ハ何ニ」ト思フ程 ニ、目代印ヲ指タス、「昔ノ事ノ 難忘ク」ト云テ、俄ニ立走テ乙ケ レバ、傀備子共弥ヨ詠ヒ早シケリ。 館ノ者共此レヲ見テ、興ジ咲テ嗤 ケル程ニ、目代恥テ印ヲ投棄テ、 立走テ逃ヌレバ、 其ノ後ハ館ノ人モ国ノ人モ、傀備 子目代トナム付テ咲ケル。	昔傀備子だった男が、出世し て目代になった。しかし、そ の心は忘れられず、傀備子の 囃子に乗せられて歌ってしま う。我に返って恥を感じ逃げ 出す目代に、人は「傀備子目 代」とあだ名し笑いあつた。 守はこれを哀れがり、目代と して使い続けた。	あだ名を笑う。 目代は「才賢ク弁ヘ有 テ」「万ニ賢ケレ」「賢 キ者」と高い評価だつ たが「心ハ不知ズ」「心 バヘ不見エズ」と人柄 はわからなかった。そ してその心は傀備神に 狂わされていたと言わ れた。
28	尼、木こ り	尼、木こ り	(○)		×	×	×	亦木伐共モ不心ズ被舞ケリ。然レ バ尼共モ木伐人共モ、互ニ舞ツ、 ナム咲ケル。 此ヲ見テ後ニナム、人共肝落居、 心直リケル。其ノ後ハ集テ咲ケリ。 其ノ比ハ此ノ事ヲナム世ニ云ヒ纏 ヒ咲ケル、	山で遭難した木こりと尼が、 舞茸を食べて互いに踊りなが ら笑つた。	茸の話。
29	世間の人、 その場に いた人	紀長谷雄	(○)	物忌を忘 れる	×	×	×	紀長谷雄は陰陽師に「人に危 害は加えない鬼が出る」と占 われたが物忌を忘れる。椽を 被つた犬を恐がる様は滑稽。 その後陰陽師は褒められ、物 忌を忘れた紀長谷雄は世間か ら非難された。	鬼の正体を見破つたの は「思量有リ心強カリ ケル者」。 長谷雄は「止事無キ者」 ではあるが陰陽方面に は暗かつたために失態 を犯す。	
30	殿上人	紀茂経	○	「物狂」	×	×	×	茂経此レヲ聞テ、嗔リ嗤ル事無限 シ。其ノ嗔ル音ヲ聞テ、此シタル 者共来ツ、咲ヒ嗤ル事無限シ。 其後思ヒ忤テ、「人ノ此ク咲ヒ嗤 ル程ハ不行ジ」ト思テ、長岳ノ家 ニナム籠居タリケル。此ノ事鬚世 ニ聞エニケレバ、其ノ比ノ物語ニ、 此ノ事ナム語テ人咲ケル。	上司の左京大夫に鯛の荒巻を 献上しようとして、自信満々 で自ら鯛を切つた。しかし、 鯛は殿上人の悪戯で知らぬ間 にガラクタに変えられてい た。左京大夫に恥をかかせ、 自分も大恥をかいたため家か ら出られず、その後左京大夫 の元へ行くことはなかった。	左京大夫は茂経を「艶 又物狂」と言っており、 最初からいい印象を持 っていない。 左京はこれを「世ノ中 ノ咲種ニシ、末ノ世マ デ物語ニセム」と恥を かくことを嘆いている。
31	当時の人	藤原清廉 (猫怖じ の大夫)	○		×	×	×	然レバ、清廉ガ猫ニ恐ルヲ、嗚呼 ノ事ト見ツレドモ、大和ノ守輔公 ノ朝臣ノ為ニハ、極メタル要事ニ テナム有ケルトゾ、其ノ時ノ人云 繚テ、世挙テ咲合ヘリ	藤原清廉は猫を異常に怖がる 人で、租税を納めず、横柄な 態度をとっていた。そこで大 和守は壺屋に清廉を呼び出 し、逃げられないようにして 猫を五匹連れ込み、税を払う よう要求した。清廉は涙を流 しながら降参し、税を払った。 世の人はこれを大和守にとつ ては好都合なことであつたと 笑いあつた。	異常に動物を怖が る。 あだ名。 藤原清廉は「盗人ノ心 有奴」、「許ノ心」の持 ち主。 守は自分でしたことと は言え、清廉のあまり の恐がりように「糸惜」 と思ひ、笑っていない。
32	雑色、妻 子、家の 者、大路 にいた人、 染殿の人	三善春家	○		×	×	×	宮ノ雑色一人、「糸可咲」トハ思 レドモ、送レテ走ケルガ、 妻子此レヲ聞テ、「前々モ然力有 ケルハ。例ノ物狂ワシキ物恐シ給 フラム」ト云テ咲ケル。	三善春家は蛇を異常に怖がる 人だった。ある時染殿で蛇を 見た時、大声をあげ、真つ青 になり靴も履かずに裸足のま ま一条大路から土御門西洞院	異常に動物を怖がる。 編者は、春家には「糸 物狂ハシクゾ有ケル」 と、その異常な振る舞 いを常軌を逸している

37	36		35	34	33
なし		世ノ人	右方の者	兵たち	亀をいじめていた人の一部、主人、聞く人
東の人		右方の落蹲の舞人	左方の者	頼方	年五十計ナル有ケル郎等
○		(○)面をつけたま	×	○	
×		×	×	×	
(○)		×	(○)右方	×	
なし	途中で欠文	事半無ク成ニケレバ、方人共皆苦ク成テ止ニケリ。其ノ中ニ、落蹲ノ舞人ノ面形ヲシ乍ラ馳テ逃タル事ヲゾ、世ノ人咲ケル。	其ノ時ニ右ノ方ニ、公忠ガ嘖テ入ルヲ見テ、手ヲ扣テ咲ヒ合タル事無限シ。相撲ノ負テ入ルヲ咲フガ如シ。	異侍共此レヲ見テ、立テ外ニテゾ咲ヒケル。	家ノ従者共モ咲ケリ。実ニ何ニ可咲カリケム、五位許ノ者ノ、七八町ト走ケムハ。大路ノ者、此レヲ見テ、何かニ咲ヒケム。春家染殿ニ参タリケルニ、物静カニモ不候ズシテ、周タル気色シテゾ罷出ニケレバ、人々此レヲ見テ、目瞬ヲシ、ゾ咲ヒ合ヘリケル。異者共ハ此ク迷フヲ見テ糸惜ガルニ、亦外ニ向テ咲フ者モ有ケリ。此レヲ見聞ク人、主ヨリ始メテ、「糸惜」トハ不云デ、憎ミ咲ヒナムシケル。其ノ後ハ、虚□モ不好云デナム有ケレバ、同僚ノ者共、其レ付テモ咲ヒケリ。
		関白は勝負もついでいないのに踊りだした右方の舞人を捕まえようとしました。舞人は面も付けたまま、馬で大宮大路を走り逃げた。これを見た事情を知らない世の人は笑いあつた。	左方、右方に分かれて種合せの勝負。真剣に牡馬を飾り立て、公忠という立派な舍人を乗せた左方に対し、右方は雌牛に貧相な老法師の薄汚い恰好をした者に乗せるといふ悪ふざけをする。それに怒って引つ込む公忠を見て笑い騒ぐ右方。	頼方は立派な兵であったが、主人のお下がりを頂く際、誤ってそのまま主人の器で食べってしまった。それを指摘され動揺した頼方は、食べた飯をそのまま皿の上に吐き戻した。他の侍たちはその醜態を外に出て笑いあつた。元々の評判も「嗚呼」に代わってしまった。	にある家まで走り抜け死んだようになってしまったのを皆で笑った。一月後、染殿に行くもまた蛇が出るのではという恐怖ときまりの悪さから早々に退室、このことも笑いの種になった。
	鳴呼絵に関する話。	花山院の御門前を誤って馬に乗ったまま通り過ぎた男が捕まる。だが、院が男の馬の扱いの見事さに試乗を許した隙について馬の腹を蹴って逃げ出した。院はこの男の肝っ玉	公忠は右方の悪ふざけを、「由シ無キ殿原ノ宣フ事ニ付テ、此ル恥ヲ見ツル」と怒っている。	頼方は「本ハ極ク心賢キ兵」と評判であつたが、この事件の後は「嗚呼」と呼ばれるようになり価値観の転換がある。	郎等は「本ヨリ片白タリケル男ノ、虚□ヲ好ケレバ」であるので嘲笑され、病み苦しむことになり、また、「世ノ人、上モ下モ由無カラム虚□シテ、猿楽然様ナラム危キ戯レ事ハ、可止シ」と怪我をするような危ない悪ふざけにたいして批判的。

42	41		40	39	38						
妻、聞く	前駈共	道行ケル者	下衆	聞いた人	郎等共、目代、聞いた人						
受領ノ郎	大学ノ衆	下衆	年極ク老タル翁	信濃守(寸白男)	藤原陳忠						
○	○	(○)	(○)「戯レ事」	×	(○)	×					
×	×	×	×	「事」 「試ム」	×	×	×	×	×	×	×
×	○	×	(○)	「事」 「試ム」	(△)	×	×	×	×	×	×
夫ノ傍ニ有ケル紙障紙ノ不意ニ倒	前駈共火ヲ打振ツ、見ルニ、□ニ表ノ衣着タル者ノ髻ヲ放テ居タレバ、「此ハ何ゾヤ」ト云テ見騒グニ、大学ノ衆音ヲ挙テ、「自然ラ音ニモ聞食スラム。記伝学生藤原ノ某、兼テハ近衛ノ御門二人倒ス蝦蟆ノ追捕使」ト名乗ルニ、「此云フハ何ゾ」ナド云テ、咲ヒ嗤テ	且ハ奇ミ、且ハ咲ヒケリ	然ラバ翁瓜ヲ作テ食ハム」ト云ヘバ、此ノ下衆共、「戯言ヲ云ナメリ」ト、「可笑」ト思テ咲ヒ合タルニ、	寸白モ然ハ人ニ成テ生ル也ケリ。聞ク人ハ此レヲ聞テ咲ケリ。	極キ損ヲ取ツル心地コスレ」ト云ヘバ、郎等共、「現ニ御損ニ候」ナド云テ、其ノ時ニゾ集テ散ト笑ヒニケリ。 忍テ己等ガトヒ咲ヒケル。 此レヲ聞ケム人争ニ憎ミ咲ケム						
妻が、自分の影を見て盗人が	自分の冠を踏みつけて、人を倒す蝦蟆を倒したと勘違いしている愚かな学生を見て「何を言っているのだ」と嘲笑している。さらに、自分で落とした冠を雑色が落としたと勘違いし雑色を追いかけ、転倒し鼻血を出す。そして道に迷い、溝の脇で一夜を明かして朝になって漸く道を尋ねながら帰るといふ愚かさ。	瓜を貰えないとわかった翁は、「自分で瓜を作って食べよう」と言ったので下衆共は馬鹿な冗談を言っていると思	瓜を貰えないとわかった翁は、「自分で瓜を作って食べよう」と言ったので下衆共は馬鹿な冗談を言っていると思	信濃守は寸白の生まれ変わりだったが、妻子にすら気付かれず普通の人間と同じように暮らしていたが、胡桃を嫌がった。これを見た介は怪しいと思ひ、酒に胡桃を入れたものを守に飲ませ試そうとした。守は堪えられず、寸白男であると自供し、水になって跡形もなく消える。世間の人	陳忠は誤って谷底に転落し、木の枝に引っかかって運よく助かった。その木には平茸が大量に生えており、危険な目にあつたことも顧みず、平茸を取りきれなかつたことを悔しがった。目代は内心この強欲な心に呆れつつ、皮肉を込めた賛辞を贈り、陰で仲間同士笑いあつた。	の太さに關心し、褒め称えた。しかし逃げ出したことで取るに足らない馬鹿な話で終わってしまった。	無キ嗚呼ノ事」に評価が下がっている。				
編者はこの男を「嗚呼	編者はこの学生を「嗚呼ノ者」と批判。また、「心ノ墓無キ」と学生の心の浅はかさを批判している。 「然レバ人尚態ニハ不依マジ、只心用也」と、技能の如何でなく、心の働きの大事であると	他人の不覚を笑う。また、翁の正体は最後まで不明。翁が術を使ったのか、下衆を騙し、謀ったのかは謎のままである。		介は「年老テ万ノ事知テ物思エケル者」。また、寸白男が普通の人として暮らしていたことは「謀り」か。 世間の人が笑つたのは①寸白そのものの嘲笑う、②うまくやつた介を評価、③守の寸白男を家族が気づいていないなどの理由が考えられる。	陳忠の「肝心ヲ不迷ハサズシテ先ズ平茸ヲ取テ上ナム心」は、怖ろしいほどの強欲であると非難。						

人	侍、傳大 納言（藤 原道綱）	43	等	×	○	×	レテ、夫ニ倒レ懸タリケレバ、夫、 「此ハ有ツル盗人ノ ヒ懸リタル 也ケリ」ト心得テ、音ヲ拳テ叫ケ レバ、妻、憎可咲ク思テ 和御許ノ弊クテ、此ノ盗人ヲバ逃 シツルゾ」ト云ケレバ、妻、「可 咲」ト思テ、咲テ止ニケリ 此レヲ聞ク人、皆、男ヲ憎ミ咲ケ リ	来たと勘違いし、夫に知らせ ノ者」と批判。弓や刀 を持つて人を警護する 郎等が臆病であること を語る。
×	フ ク 可 咲 物	44	不 覺 （○）	×	○	×	「主達ヨ。此レ見ヨ。寺冠社冠ノ 得テセムヤハ。一ノ大納言ノ御旧 烏帽子ノコソハ、給ハリテセメ」 トテ、頸ヲ持立テ、シタリ顔ニ袖 ヲ打合セテ居タリケルヲ見テ、人 皆ナ咲ヒケリ。 大納言モ此レヲ聞テ、咲ヒ給ヒケ リ	鼠に烏帽子を食い破られ、壺 屋に引きこもっていた内藤を 哀れんで、大納言が烏帽子を 与える。それを得意げに自慢 者」で、ちよつとした し、同僚の侍を笑わせた。大 納言もこれを聞いて笑ったと いう。
男	下 衆 男 の 行 動	44	後 から 入 （○）	×	○	×	然ルニテモ本ノ男、餅ヲ食テ、今 ノ奴ノ逃ニケルヲ、何カニ「可咲」 ト思ヒケム	雨宿りの為墓穴に入った下衆 男の元に、夜遅く人が入って くる。その人がお供え物とし て置いた餅をこっそりと食べ ると、下衆男を鬼だと勘違い し、逃げてしまった。思わぬ ことからその男の荷物を得て 儲けた。餅を食って逃げた男 の勘違いを、下衆男は笑った であろう。
								下衆男は「思量有リ心 賢カリケル奴」。編者 は、この男の心を「糸 蠢付シ」と怖ろしく思 っている。心の賢いも のは下衆であつても様 々な事に上手く対処で きると評価している。